

平成30年度卒業論文

# オノマトペ研究～ハ行の音象徴～

2019年1月31日  
国語表現ゼミナール  
指導教員 野浪正隆先生

大阪教育大学国語教育専攻中学校コース  
152204 生越真理  
(400字詰め原稿用紙換算 264枚)

## 目次

第一章 研究動機	p2
第二章 研究対象	p3
第一節 オノマトペとは	p3
第二節 分析対象	p4
第三章 オノマトペの意味からみる音象徴	p6
第一節 オノマトペの分類	p6
第二節 特殊モーラ、リ音、反復形にみられる音象徴	p10
第三節 濁音化、半濁音化による音象徴の変化	p18
第四節 子音の音象徴	p33
第一項 / h / の音象徴	p33
第二項 / p / ・ / b / の音象徴	p38
第五節 母音の音象徴	p42
第一項 Edward Sapirの実験	p42
第二項 / a / の音象徴	p44
第三項 / i / の音象徴	p45
第四項 / u / の音象徴	p46
第五項 / o / の音象徴	p48
第六項 / e / の音象徴	p50
第七項 第三章のまとめ	p53
第四章 音象徴と音声	p54
第一節 子音の音声	p54
第一項 は行の音声	p57
第二項 ば、ぱ行の音声	p58
第二節 母音の音声	p62
第三節 第四章のまとめ	p63
第五章 まとめ・今後の課題	p64
第六章 参考文献	p65
巻末資料	

## 第一章 研究動機

「ピカチュウ」という有名なキャラクターがいる。彼の名前「ピカチュウ」は光る様子を表す「ピカピカ」とねずみの鳴き声を表す「チュウ」という二つのオノマトペを組み合わせて作られたものである。「ピカチュウ」が電気を使うネズミであることをよく表している名前だといっていいだろう。

さて、光輝く様子を表す言葉は他にもある。例として「キラキラ」をあげよう。二つのオノマトペの意味は、辞典において以下のように解説されている。

「ぴかぴか ① さま 点滅したり、向きを変えたりして光輝くさま。」<sup>1</sup>

「きらきら ① さま 明るくまぶしく光り輝くさま。」<sup>2</sup>

引用元 小野正弘『擬音語擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』P354 P76

このように、「ピカピカ」も「キラキラ」も光り輝く様子を表す擬態語なのである。

では、「ピカピカ」の代わりに「キラキラ」を「チュウ」と組み合わせてみる。「キラチュウ」。これでは正直、可愛くない。可愛くないどころか、どこか装飾過剰のようないやらしさすら感じる気がする。

なぜ「ピカピカ」と「キラキラ」には大きな意味の違いがないにも関わらず、これだけ受ける印象が変わるのだろうか。私は、この違いが「ピカ」と「キラ」という音の違いによって引き起こされていると考え、このような言語の音によって起こされるイメージを研究テーマにすることにした。

このような「音と意味との感覚的つながり」<sup>3</sup> を音象徴と呼ぶ。しかし、多くの言語記号は意味と恣意的に結びついているため、音象徴を確認することが難しい。

そこで、実際の音と強い結びつきを持つ擬音語と、実際の様子を描写する擬態語であれば、その他の言葉に比べて、音と意味のつながりが強くみられるのではないかと考え、オノマトペを研究対象とすることにした。

オノマトペの分析を通して、どのような音がどのようなイメージとつながっているのかということを考察していくことが本研究の目的である。そして、それを通して得た結果を自らの言語生活に還元することで、自分の言語表現をよりよいものにすることを目指すことにしたい。

1 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』（小学館 2007 年 10 月）P354

2 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』（小学館 2007 年 10 月）P76

3 篠原和子・宇野涼子編『オノマトペ研究の射程－近づく音と意味』（ひつじ書房 2013 年 4 月）P4

## 第二章 研究対象

### 第一節 オノマトペとは

日本語の「オノマトペ」はフランス語onomatopéeに由来する。英語ではonomatopoeiaと表記し、寺澤芳雄編『英語語源辞典』（研究社 1997年）によると、onomatopoeiaは、ギリシャ語のonomatopoiiaを語源にしているとされている。

「*Onomatopoiia* the making of words ← *onomat-, ónoma* ‘NAME’ + *po(i)ein* to make」<sup>4</sup>

寺澤芳雄 編『英語語源辞典』 P990

ここからわかるように、onomatopoiiaは onoma(name) と poiein(to make) の組み合わせによって作られた言葉であり、onomatopoiiaそのものは「名前をつくる」という意味を持っている。しかし、現在の私達は「オノマトペ」という言葉を「名前をつくる」という意味では用いない。

ではどのように用いるのかということ、現在、一般的にオノマトペと呼ばれるものは、従来、擬音語や擬態語と呼ばれてきた言葉である。擬音語と擬態語は新村出 編『広辞苑 第七版』で以下のように説明されている

「【擬音語】実際の音をまねて言葉とした語。「さらさら」「ざあざあ」「わんわん」など。」<sup>5</sup>

「【擬態語】視覚・触覚など聴覚以外の感覚印象を言語音で表現した語。「にやにや」「ふらふら」「ゆったり」の類」<sup>6</sup>

引用元 新村出 編『広辞苑 第七版』 P688 P714

これらの言葉に共通するのは、その他の言葉と違ってその言葉自体で出来事そのものを表現できるという点である。

例えばオノマトペではない言葉として「机」という言葉について考えてみる。「机」という言葉を聞いて私達が思い浮かべるのは、ベニヤ板やガラスの板などの天板を持ち、ある程度長さのある足でそれを支えている家具であり、その上に物を置くことができたり本を読むなどの活動ができたりするもの、などではないだろうか。逆に言うと、その家具そのもの以外を「机」という言葉からイメージすることは難しい。

では、オノマトペはどうだろうか。「すくすく」というオノマトペについて考えてみる。「すくすく」というオノマトペを聞いてイメージするのは、人や植物が遮られることなく順調に育っていく様子である。これは「机」と聞いて思い浮かぶものが机そのものの静止画のみであることとは少し異なる。このように、オノマトペとは一語で説明するのが困難

4 寺澤芳雄 編『英語語源辞典』（研究社 1997年6月）P990

5 新村出 編『広辞苑 第七版』（岩波書店 2018年1月）P688

6 同上 P714

な出来事を直接表すことのできる言葉であるといえるだろう。それを出来事そのものに名前をつけるということだと考えると「名前をつくる」という意味のonomatopoiiaを語源としていることにも納得できる。

また、オノマトペとオノマトペ以外の言葉の違いは他にもある。再び「机」という言葉を例に出すが、「机」という言葉によって思い浮かぶ家具のことを「机」と呼ぶ理由は慣習的にそうなっているからであり「つ」と「く」と「え」の三音が家具の机と何らかの関係を持っているわけではない。このように、言語の大半は表現する対象と恣意的に結びついているのである。

しかし、オノマトペはそうではない。そもそも擬音語は実際の音になるべく近い音を当てはめて作られた言葉なので、実際の音とオノマトペに使われている音の間に強い関係性があるのは当然であるといえる。また、擬態語も、安堵の「ほっ」や、微笑みの「にこにこ」など聴覚以外で得た感覚を人間が相応しいと考えた言語音で表現したものなので、オノマトペに使われている音と表そうとしている感覚の間につながりがあると考えられる。そして、このような音と意味との強い結びつきは、時に音声に新たな意味を生み出している。

「ある音声は、たまたまそれを含む特定の語の固有の意味とは別の、象徴的な意味、すなわち一般的に想定されている語と意味の慣習的な関係を超える意味、を表すことがある。これを「音象徴」と言う。」<sup>7</sup>

引用元 田守育啓『オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ』P134

ここからは、この「音象徴」とはどのようなものなのか、そしてどこから発生しているのかということをおノマトペを対象として考えていくことにする。

## 第二節 分析対象

研究にあたって、できるだけ多くのオノマトペを研究対象としたかったが、研究範囲が広くなりすぎるため、今回はは行、ば行、ぱ行の音から始まるオノマトペを対象を限定し、それらの音がどのようなイメージとつながっているかを研究することにした。は行を選択したのは、は行には他の行に比べて多くのオノマトペがあるうえ、濁音と半濁音が両方みられる行であるため、濁音や半濁音化の影響を観察することができると思ったからである。

研究対象とするオノマトペは、小野正弘編『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』のは行の欄に掲載されている1079語の中から、古語や方言として紹介されているものを除いた925語とする。その中で、掲載されている意味や用法も参考にしながら、は行の音がどのような音象徴を持つのかを考察していく。

7 田守育啓『オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ』（岩波書店 2002年9月）P134

また、音象徴は、音と意味のつながりであるため、意味の面だけではなく、は行・ば行・ぱ行の音声を音声学研究を参考に分析し、音声の面から、調音器官の動きや音の響きが音象徴に関わる可能性があるのかについてもみていくことにする。

### 第三章 オノマトペの意味からみる音象徴

#### 第一節 オノマトペの分類

これまで複数の研究によってオノマトペはさまざまな観点で分類されてきた。そのなかでも、今回は、丹野眞智俊『オノマトペ《擬音語・擬態語》を考える—日本語音韻の心理学的研究—』（あいり出版 2005年）と、浜野祥子『日本語のオノマトペ—音象徴と構造—』（くろしお出版 2014年）で用いられている分類法に基づいて、研究対象である925語のオノマトペを分類することにした。

まずは、丹野眞智俊『オノマトペ《擬音語・擬態語》を考える—日本語音韻の心理学的研究—』における分類である。この分類ではオノマトペに使われているモーラを分類の基に置き、オノマトペの形態をいくつかのパターンに分類している。

モーラというのは

「仮名文字一つに相当する（短母音に等しい）長さの単位。普通は「あ」「か」「さ」などの自立モーラを指すが、長音「ー」、撥音「ん」、促音「っ」などの特殊モーラも同じ長さを持つ。拍。」<sup>8</sup>

引用元 新村出 編『広辞苑 第七版』 P2901

例えば俳句を作る際に五・七・五と数えるものがモーラである。「は」や「び」のような子音＋母音で成り立つ音。「あ」や「い」などの単独母音。加えて撥音や促音、長音などは全て一つで一モーラとなる。それに対して「ゃ」「ゅ」「ょ」などの拗音は、「ひゃ」「びょ」などの形になってはじめて一モーラと数えられる。

このようなモーラを単位としてオノマトペの分類を行うのだが、その分類法は以下の通りである。

- 「（１）ある音を表す仮名の代わりに、X、Y、Z、Wを用いる。
  - （２）長音を「：」で表わす。
  - （３）基本とみられる形（現代語・標準語として、その形が使われなくても、潜在的に、それが意識されるようなものも含む）につく促音の「ツ」を「t」で表わす。
  - （４）基本とみられる形につく「リ」を「r」で表わす。
  - （５）基本とみられる形につく「ン」を「n」で表わす。
- （したがって、基本とみられる形の中に含まれている「リ・ン」は、それぞれの拍の位置によって、X、Y、Z、またはWとする）。」<sup>9</sup>

8 新村出 編『広辞苑 第七版』（岩波書店 2018年1月）P2901

9 丹野眞智俊『オノマトペ《擬音語・擬態語》を考える—日本語音韻の心理学的研究—』（あいり出版 2005年8月）P19-P20

引用元 丹野眞智俊『オノマトペ《擬音語・擬態語》を考える  
—日本語音韻の心理学的研究—』 P19-P20

これらの基準によって、分類を行った結果、以下のようなパターンが見られた。

形態	数	例
X:	10	「はー」「ひー」など
X:t	7	「はーっ」「ほーっ」など
X:X:	18	「はーはー」「ひーひー」など
X:Y	13	「ばーん」「ひーん」など
X:YZ	5	「ひーこら」「へーこら」など
XnYr	7	「はんなり」「ひんなり」など
XnYZ	1	「ぺんぽこ」
Xt	18	「はっ」「ひっ」など
XtX	3	「ぱっぱ」「ぷっぷ」など
XtXt	13	「はっはっ」「ひっひっ」など
XtY	6	「はった」「ひっく」など
XtYn	7	「ぱっくん」「ぶっつん」など
XtYnZ	4	「ぱったんこ」「びったんこ」など
XtYr	72	「はっきり」「びっくり」など
XtYrZ	2	「ぱったりこ」「びっかりこ」
XtYXY	2	「びっかびか」「びっちびち」
XtYZ	9	「びっくら」「ふっくら」など
XtYZW	3	「ぱったひし」「へっくしょん」など
XXn	2	「ひひん」「ふふん」
XXt	3	「ぱぱっ」「ぴぴっ」など
XXX	7	「ははは」「ひひひ」など
XXY	1	「ひよひよい」
XY	44	「ばい」「びく」など
XY:n	2	「びゅわーん」「びよーん」
XYn	70	「ばきん」「びたん」など
XYnZ	7	「びしゃんこ」「ぺしゃんこ」など
XYr	93	「ぱくり」「びくり」など
XYrn	2	「ぶらりん」「ぼつりん」など
XYt	120	「ばかっ」「ひくっ」など
XYXY	216	「ばかばか」「びかびか」など
XYXYZWZ	2	「ぶかぶかどんどん」「べんべんだらだら」



XYXZXY	3	「ばんぱかばん」「ぺんぺこぺん」など
XYY	6	「びりり」「ぶるる」など
XYYn	2	「ひゆるるん」「ぴろろん」
XYZ	2	「ひよろ」「ぼうだ」
XYZn	1	「ぼてれん」
XYZr	1	「ぼいやり」
XYZW	19	「ばたくさ」「ひそくさ」など
XYZWXYZW	7	「ばっくんばっくん」「へっこらへっこら」など
XYZWYZ	4	「びんこしゃんこ」「ぶらんさらん」など
XYZXYZ	63	「ばくりばくり」「ぴかりぴかり」など
XYZY	18	「ばかすか」「ひねくね」など
その他	30	「ばぶー」「ぴーひょろろ」など
全体	925	

この表からは、多くのオノマトペが一つか二つの音（XとY）とその他の促音、撥音、長音、リ音を組み合わせて作られていることがわかる。語基に使われる音が二種類以下のオノマトペは744語あり、全体の約80%を占めることから、一モーラか二モーラの音に促音、撥音、長音、リ音などの要素を組み合わせるのがオノマトペの基本的な形態であることが確認できるであろう。

また、三つの音（X、Y、Z）を用いて作られるXYXYZWZW型、XYZXYZ型やXYZWXYZW型のオノマトペをみてみると。

XYXYZWZW型	ぴくんぴくん	ぷらりぷらり	ぽつりぽつり
ぶかぶかどんどん	びしりびしり	ぶらんぶらん	ぼつんぼつん
べんべんだらだら	びたりびたり	ぶらんぶらん	ぼつんぼつん
	ぴたんぴたん	ぷりんぷりん	ぼとらぼとら
	びちよりびちより	ぶるんぶるん	ぼとりぼとり
XYZXYZ型	ぴっかぴっか	ぷるんぷるん	ほやりほやり
ばかりばかり	ぴっちぴっち	ふわりふわり	ほろりほろり
ばくりばくり	ひやりひやり	ぺこんぺこん	ぼろりぼろり
ばくりばくり	ひよくりひよくり	べそりべそり	ぼわりぼわり
ばさらばさら	ひよこりひよこり	べたりべたり	
はたりはたり	ひよろりひよろり	べたりべたり	
ばたりばたり	ひらりひらり	べろんべろん	
ばたりばたり	ふかりふかり	ぺろんぺろん	XYZWXYZW型
ばっかばっか	ぶかりぶかり	ぼかりぼかり	ばっくんばっくん
ばっさばっさ	ぶくりぶくり	ぼかりぼかり	ぶらっかぶらっか
ばったばった	ぶくんぶくん	ほぎゃーほぎゃー	へっこらへっこら

ばらんばらん	ぶすりぶすり	ぼくりぼくり	ぺったんぺったん
ぴかりぴかり	ぷすりぷすり	ぽくりぽくり	ぽっくりぽっくり
びくりびくり	ふらりふらり	ぼちんぼちん	ぽっくりぽっくり
びくりびくり	ぶらりぶらり	ぼつりぼつり	ぽつりぽつり

ここにみられるように、三つの音を用いて作られる型のオノマトペは、全て同じ要素が繰り返される反復形のものであった。

そのうえ、繰り返される要素は XtX 型、XYr 型、XYn 型、XYXY 型、XtYn 型や XtYr 型など二モーラ以下の音と特殊モーラで作られたオノマトペにみられる形態のものが大半であった。(例外は、「ほぎゃーほぎゃー」「ぶらっかぶらっか」「へっころへっころ」のみである) ここから、これらの XYXYZW 型、XYZXYZ 型、XYZWXYZW 型も XYr 型などの二モーラ以下で作られるオノマトペの形の反復形ということができるだろう。

以上のことからオノマトペは、一モーラか二モーラの音に、促音、撥音、長音などの特殊モーラやリ音を組み合わせたものが基本形であると考えることができる。

次に、浜野祥子『日本語のオノマトペ—音象徴と構造—』に基づいた分類を行う。この分類はオノマトペを語根の形状から二種類に分類している。今回は、それぞれの音が持つ音象徴的機能について考えるためにそれらの分類を用いることにした。

そもそも語根とは以下のような言語の単位である。

「同系の諸言語あるいは一言語内のいくつかの語に見出される共通の意味を表す、それ以上分析できない形態」<sup>10</sup>

引用元 新村出 編『広辞苑 第七版』 P1049

これは先の分類で X、Y、Z、W などの記号で示された音であり、X と特殊モーラとリ音で作られるオノマトペを CV 型、XY と特殊モーラとリ音で作られるオノマトペを CVCV 型とすることができる。

## 1、CVタイプ

「はーっ」「びびっ」「ぼん」など、語根が一種類の CV (C 子音 V 母音) で形成されているもの。それぞれの語根は「は」「び」「ぼ」である。

分析対象としたオノマトペ 925 語のうち CV タイプのオノマトペは 132 語みられた。そのなかで擬音語としての意味をもつのは 102 語 (約 77%)、擬態語としての意味を持つのは 116 語 (約 88%) である。(両方の意味を持つ語があるため、両者の合計は全体数にはならない)

CV タイプのオノマトペは CVCV タイプに比べて擬音語の意味を持つものが多いという特徴

10 新村出 編『広辞苑 第七版』 (岩波書店 2008 年 1 月) P1049

がある。基本的に聞こえた音をそのまま描写する擬音語は、擬態語よりも表される出来事と言葉の音の関係が強いため、CVタイプのオノマトペはCVCVタイプに比べて、より音で出来事そのものを表すという側面が強いものが集められていると考えられる。

## 2、CVCVタイプ

「ばきっ」「ぴかぴか」「ぽこり」など、語根が二種類の CVで形成されているもの。それぞれの語根は「ばき」「ぴか」「ぽこ」である。

分析対象としたオノマトペ 925 語のうちCVCVタイプのオノマトペは 729 語みられた。

そのなかで擬音語の意味を持つのは 325 語（約45%）擬態語の意味を持つのは 696（約95%）である。（合計は全体数にならない）

こちらは、CVタイプに比べて擬音語の割合が低く、出来事そのものを描写する力が弱いものが集められている。その代わり心情表現など音と意味が直接つながらない表現がよくみられるタイプであるといえるだろう。

## 第二節 特殊モーラ、リ音、反復形にみられる音象徴

オノマトペを分類することで、オノマトペの基本的な形態が一モーラか二モーラの語根に、促音、撥音、リ音、長音を組み合わせたものであるということがわかった。ここから、オノマトペにみられる音象徴を読み取っていくのだが、まずはさまざまなオノマトペにみられる特殊モーラとリ音が持つ音象徴について考えていきたい。

また、その他に複数のオノマトペにみられる形態として、XYXY型のようにある要素が複数回繰り返される反復形も考えられるため、反復形が音象徴に与える影響についても触れていくことにする。

今回は、異なる要素を持つオノマトペを比較することでそれぞれの音象徴を考えていくので、CVCVタイプのもので同じ語根にできるだけ多くの特殊モーラ、リ音、反復形による派生形が作られているオノマトペをとりあげていく。

語根	促音	撥音	リ音	反復形
ぱく	ぱくっ	ぱくん	ぱくり	ぱくぱく
ぱし	ぱしっ	ぱしん	ぱしり	ぱしぱし
ぱた	ぱたっ	ぱたん	ぱたり	ぱたぱた
ぱち	ぱちっ	ぱちん	ぱちり	ぱちぱち
ぱちゃ	ぱちゃっ	ぱちゃん	ぱちゃり	ぱちゃぱちゃ
びく	びくっ	びくん	びくり	びくびく
ぴく	ぴくっ	ぴくん	ぴくり	ぴくぴく
ぴしゃ	ぴしゃっ	ぴしゃん	ぴしゃり	ぴしゃぴしゃ

びた	びたっ	びたん	びたり	びたびた
びた	びたっ	びたん	びたり	びたびた
ぷく	ぷくっ	ぷくん	ぷくり	ぷくぷく
ぶつ	ぶつっ	ぶつん	ぶつり	ぶつぶつ
ぶつ	ぶつっ	ぶつん	ぶつり	ぶつぶつ
ぶら	ぶらっ	ぶらん	ぶらり	ぶらぶら
ぶる	ぶるっ	ぶるん	ぶるり	ぶるぶる
ぺこ	ぺこっ	ぺこん	ぺこり	ぺこぺこ
べしや	べしやっ	べしやん	べしやり	べしやべしや
べしや	べしやっ	べしやん	べしやり	べしやべしや
べた	べたっ	べたん	べたり	べたべた
ぺた	ぺたっ	ぺたん	ぺたり	ぺたぺた
ぼか	ぼかっ	ぼかん	ぼかり	ぼかぼか
ぼか	ぼかっ	ぼかん	ぼかり	ぼかぼか
ぼき	ぼきっ	ぼきん	ぼきり	ぼきぼき
ぼき	ぼきっ	ぼきん	ぼきり	ぼきぼき
ぼこ	ぼこっ	ぼこん	ぼこり	ぼこぼこ
ぼこ	ぼこっ	ぼこん	ぼこり	ぼこぼこ
ぼそ	ぼそっ	ぼそん	ぼそり	ぼそぼそ
ぼちゃ	ぼちゃっ	ぼちゃん	ぼちゃり	ぼちゃぼちゃ
ぼつ	ぼつっ	ぼつん	ぼつり	ぼつぼつ
ぼつ	ぼつっ	ぼつん	ぼつり	ぼつぼつ
ぼと	ぼとっ	ぼとん	ぼとり	ぼとぼと
ぼと	ぼとっ	ぼとん	ぼとり	ぼとぼと
ぼろ	ぼろっ	ぼろん	ぼろり	ぼろぼろ
ぼろ	ぼろっ	ぼろん	ぼろり	ぼろぼろ

分析対象としたオノマトペの中に、促音、撥音、リ音、長音、反復形、全ての派生形を持つものは残念ながらみられなかったが、促音、撥音、リ音、反復形の派生形を持つ語根は36みられた。それに加えて、ここにあげられた語根は、リ音や撥音を伴った反復形「びたりびたり」「びたんびたん」などにも変化する場合がみられる。

また、ここにあげられていない語根にも、促音、リ音、反復形の派生形はみられるが撥音の派生形だけがみられないというものもあった。(特に「ふら」「へろ」「ほろ」などは行で始まる語根は撥音と繋がりにくいようである) 先の一つ目の分類からみても、XYt

型 120 語 XYr 型93語XYXY型 216 語に比べて、XYn 型は70語しかみられないところから、

撥音が語尾につく派生の仕方は他の派生に比べて発生しにくいことが推測されるであろう。

ここからCVCVタイプのオノマトペには、基本的に促音、撥音、リ音、反復形、リ音の反復形、撥音の反復形という派生があり、その中のいくつかがオノマトペとして実際に用い

られていると考えることができる。もちろん「ぶるる」などこれらの法則に囚われないオノマトペも存在するため、この法則はあくまで多くの語根にみられる派生の仕方に過ぎない。

さて、残りの長音についてだが、今回分析対象としたオノマトペの中にはCVCVタイプの語尾に長音がつく形態は、「ばぶー」の1語しかみられなかった。そのため、CVタイプのものから促音、撥音、長音、長音の反復形がみられる語根を分析対象とすることにした。

語根	促音	撥音	長音	長音の反復形
ば	ばっ	ばん	ばー	ばーばー
ひ	ひっ	ひん	ひー	ひーひー
び	びっ	びん	びー	びーびー
ぴ	ぴっ	ぴん	ぴー	ぴーぴー
ひゅ	ひゅっ	ひゅん	ひゅー	ひゅーひゅー
びゅ	びゅっ	びゅん	びゅー	びゅーびゅー
ぴゅ	ぴゅっ	ぴゅん	ぴゅー	ぴゅーぴゅー
ふ	ふっ	ふん	ふー	ふーふー
ぶ	ぶっ	ぶん	ぶー	ぶーぶー
ぶ	ぶっ	ぶん	ぶー	ぶーぶー

CVタイプの派生はCVCVタイプより更に限定的である。そもそも、は、ば、ば行から始まるオノマトペでCVタイプのオノマトペを作ろうとすると、自然と語根は「は」「ば」「ば」「ひ」「び」「び」「ひゃ」「ひゅ」「ひょ」「びゃ」「びゅ」「びょ」「びゃ」「びゅ」「びょ」「ふ」「ぶ」「ぶ」「へ」「べ」「べ」「ほ」「ぼ」「ぼ」の24種類に限定されてしまう。その中で、今回分析対象としたオノマトペの中にみられたのは「ひゃ」「びゃ」「びゃ」「びょ」を除く20種類である。

そして、これらの語根の派生は表にあげた四つに加えて、長音+促音「はーっ」長音+撥音「はーん」各種の反復形「ははは」「ははっ」「ふふん」「はっはっ」「ばんばん」などが大半である。（例外は2語のみ）

ここからCVタイプのオノマトペには、促音、撥音、長音、長音+促音、長音+撥音、語根の反復（語尾に促音や撥音がつくこともある）促音の反復、撥音の反復、長音の反復という派生がみられることがわかる。

では、基本的なオノマトペの形の変化をみてきたところで、これらにみられる特殊モーラとり音、反復形が持つ音象徴について考えていくことにする。

例として「ぱく」「ぷく」「ぽと」の三種類の語根を用いることにする。  
(これ以降、引用部にみられる下線は引用者によるものである)

## 1、促音

「その先生の右手から、黄の綾を着た娘が立って、花瓶にさした何かの花を、一枝とって水につけ、やさしく馬につきつけた。馬はぱくっとそれを噛み、大きな息を一つして、ぺたんと四つ脚を折り、今度はごうごういびきをかいて、首を落してねむってしまう。」<sup>11</sup>

「ぷくっとふくれた君もステキさ」<sup>12</sup>

「本場ピエモンテでは　ヘーゼルナッツで作りますが  
今回は日本で手に入りやすいアーモンド粉と  
食感を出すために　クルミを砕いたものを加えています  
成型はしなくていいです  
スプーンで　ぽとっと　落としていくだけ・・・」<sup>13</sup>

引用元 宮沢賢治『新編 銀河鉄道の夜』 「北守将軍と三人兄弟の医者」 P146-P147

引用元 「気になるあの娘」

引用元 「ローマのおいしい生活 in東京」

これらのオノマトペに共通してみられることは、描かれている行動・状況が一瞬の出来事であるということである。つまり、オノマトペが表す動作が、急激に収束しているのである。

このことは小野正弘『擬音語擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』の各語の項目でも確認できる。例えば、促音の「ぱくっ」と撥音の「ぱくん」の項目を比較してみる。

「ぱくっ ①　さま　口を大きく開けてひと口で食べるさま。」<sup>14</sup>

「ぱくん ①　さま　大きく口をあけてものを食べるさま。」<sup>15</sup>

11 宮沢賢治『新編 銀河鉄道の夜』 「北守将軍と三人兄弟の医者」 (新潮社 1989年6月) P146-P147

12 「気になるあの娘」 (<https://cakes.mu/posts/225503>) [最終閲覧日 2019年1月30日 11:2](#)

13 「ローマのおいしい生活 in東京」

(<http://cucinayukos.blog.jp/archives/9058284.html>) 最終閲覧日 2019年1月30日 11:24

14 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』 (小学館 2007年10月) P330

15 同上 P331

このように「ばくっ」には食べるという動作を一瞬で終わらせてしまうことを表す「ひと口で」という言葉が含まれるが「ばくん」の項目にそれは存在しない。ここからも、オノマトペの語尾につく促音には、動作が急激に終わったように感じさせる効果があるといえる。

もちろんこの効果は、先に挙げたような CVCVタイプの擬態語に限らず「ばっ」「ぴっ」などのCVタイプのオノマトペや擬音語にも当てはまる。同じ笛の音でも「ピーと笛を吹く」「ピッと笛を吹く」の二つを比較した場合、どちらの音が短く感じるかといえばその違いは明白であろう。

また、促音には続いていた音や動作を突然断ち切る効果もみられる。

先ほどCVタイプのオノマトペの中に長音+促音の形を持つものがあると述べたが、このような形態のオノマトペでは、長音で持続していた音や行動が促音で断ち切られる様子がみられる。

「パーと広がる」と「パーッと広がる」とした場合、前者は終わりがなくどこまでも広がっていく印象を受けるが、後者には動作の終わりの瞬間が存在する。ここにも、促音が生み出す音象徴の影響があるといえるだろう。

## 2、撥音

「彼は甘藷についている飯粒を振り払い、ばくんと開いた口の中へ抛り込んだ」<sup>16</sup>

「養鶏場の経営者は下のまぶたがぶくんとふくれたおそろしく無表情な男で、ぼくが高根圭一から金の支払い方法を聞いてこなかった、と言ってひどく不服そうだった。」<sup>17</sup>

「こいのぼり ロープひきちぎれ  
空を泳げ ぼとんとおちるまで」<sup>18</sup>

引用元 岡本かの子『食魔』 P85

引用元 椎名誠『新橋烏森口青春篇』 P23

引用元 竹原ピストル「高千穂峠のこいのぼり～ワルフザケガスギル MIX～」

撥音がつくオノマトペは、促音がつくオノマトペのような、音や動作を急激に終わらせるようなものではない。「ばくん

16 岡本かの子『食魔』（講談社 2009年2月）P85

17 椎名誠『新橋烏森口青春篇』（新潮社 1991年5月）P23

18 竹原ピストル「高千穂峠のこいのぼり～ワルフザケガスギル MIX～」  
(<https://www.uta-net.com/song/128864/> 2012年4月)

み」は、口を開け、その中に食べ物を入れて、口を閉じるまでの一連の動作は同じだが、口を閉じるまでで終わってしまう「ぱくっ」に比べて「ぱくん」には飲みこむまでの過程と時間を感じさせられる。この違いは、「口をぱくっと開けた」といえるのに対して「口をぱくんと開けた」とはいわないところからも読み取れる。「ぱくん」には口を開けるだけでなく、ものを飲みこむまでの過程が含まれているといえるだろう。

また「ぷく」の用例でも、「ぷくっ」の用例の場合は頬を膨らませるといふ一瞬の動作を表していたが、「下のまぶたがぷくんとふくれたおそろしく無表情な男」というのは、その男の顔の特徴であり、これからも継続していくものである。

このように、撥音のつくオノマトペは促音のつくオノマトペのように音や動作を突然終わらせることはせず、その後も継続しているものを含んだ言葉であると推測される。

では、音や動作の後に継続するものとは何なのだろうか。それは、撥音がつく擬音語をみた際にわかりやすくなる。ここでは、手を叩く音を表すオノマトペ「パン」を例に考えることにしたい。

まず「パンパンと手を叩く」とはいえるが「パパと手を叩く」とはいえない。それは、「パパ」という言葉の音が手を叩く時に発する音と結びつかないからである。そして、その理由は「パパ」という音には残響や余韻といったものがないからではないだろうか。手を叩く音は辺りに反響して響く音であるため、その響きを表現するために撥音が用いられているのである。

ここから、撥音のつくオノマトペは一つの音や動作を一応終わらせはするものの、その後続く残響や余韻までをまとめて表すオノマトペであるといえる。

### 3、リ音

「鏡を見ると、鼻のわきの化膿部がぱくりと口をあけ、かちかちに乾燥しているのが分った。」<sup>19</sup>

「仰向に頭の下には、兩の指を組み合せに手を敷いて、柔かな羽根蒲團にプクリと身を沈ませながら、苛立ち易くも、西山普烈は、思はずさう呟いた。」<sup>20</sup>

「甲野さんは又日記を取り上げた。青貝の洋筆軸を、ぼとりと墨壺の底に落す。」<sup>21</sup>

引用元 井伏鱒二『黒い雨』P162

引用元 里見弴『多情沸心 後篇』P13

引用元 夏目漱石『虞美人草』P311

19 井伏鱒二『黒い雨』（新潮社 1985年6月）P162

20 里見弴『多情沸心 後篇』（新潮社 1941年11月）P13

21 夏目漱石『虞美人草』（新潮社 2010年5月）P311



促音は、音や動作を急激に終わらせるもの。撥音は音や動作の後に残る残響や余韻を表すものとしてきたが、音や動作の処理の仕方という観点でみるのであれば、リ音はその間のようなものである。促音のように急激に断ち切ることはしないが、撥音のように引きずるわけでもない。オノマトペの語尾のリ音は、音や動作を一つにまとめる効果を持っているのである。

倒れるという意味を表す「ばた」というオノマトペを例に考えてみる。「ばたばた倒れる」と「ばたりばたり倒れる」という文章を比較してみると、「ばたばた倒れる」はそこかしこでものが次々に倒れている様子を表すが「ばたりばたり倒れる」となると一つのものが倒れてから、次のものが倒れるというように、一まとまりの倒れるという動作が繰り返されている様子を表している。ここから、リ音は語根が表す音や動作を一まとまりのものとする効果があるといえるだろう。

また、リ音のオノマトペは促音のオノマトペに比べて、音や動作がゆったりとしている印象を与えることがある。以下は同じ語根に促音とリ音が付属したオノマトペの用例である。

「その先生の右手から、黄の綾を着た娘が立って、花瓶にさした何かの花を、一枝とって水につけ、やさしく馬につきつけた。馬はぱくっとそれを噛み、大きな息を一つして、ぺたんとして四脚を折り、今度はごうごういびきをかいて、首を落してねむってしまう。」<sup>22</sup>

「弟子はおじぎを一つして、となりの室へ入って行って、しばらくごとごとしていたが、まもなく赤い小さな餅を、皿にのつけて帰って来た。先生はそれをつまみあげ、しばらく指ではさんだり、匂をかいたりしていたが、何か決心したらしく、馬にぱくりと喰べさせた。」<sup>23</sup>

引用元 宮沢賢治『新編 銀河鉄道の夜』 「北守将軍と三人兄弟の医者」 P146-147 P152

「するとかっこうはにわかにはびっくりしたやうにいきなり窓をめがけて飛び立ちました。そして硝子にはげしく頭をぶっつけてばたっと下へ落ちました。」<sup>24</sup>

「絶えず体に波を打たせていた蛇の下半身が、先ずばたりと麦門冬の植えてある雨垂落の上に落ちた。」<sup>25</sup>

引用元 宮沢賢治『宮沢賢治全集』 「セロ弾きのゴーシュ」 P227

引用元 森鷗外『雁』 P109

22 宮沢賢治『新編 銀河鉄道の夜』 「北守将軍と三人兄弟の医者」（新潮社 1989年6月）P146-P147

23 同上 P152

24 宮沢賢治『宮沢賢治全集』 「セロ弾きのゴーシュ」（筑摩書房 1974年3月）P227

25 森鷗外『雁』（岩波書店 2002年10月）P109

例えば、同じ馬がものを食べる様子でも「ぱくっ」は一瞬で食べてしまう様子を「ぱくり」は「ぱくっ」に比べて一口がゆったりとしている様子を思わせる。このように、動作の急激な終了を感じさせる促音のオノマトペに比べて、リ音が付属するオノマトペは、その動作自体がゆっくりしたものだと感じさせる効果があるようである。

#### 4、反復

「母が原始的な質問をしかけたので、太郎はその素朴さを訂正しようとしたが、口をばくばくさせただけで、結局は黙っていた。」<sup>26</sup>

「そのやぶれ目から、ぷくぷくふとってふくらんで、風船のようなまるがおの男がひとり、顔を出し、間ののびた声でふたりに挨拶した。」<sup>27</sup>

「彼の顔からも腕からもまだ潮水がぼとぼとと滴った。」<sup>28</sup>

引用元 曾野綾子『太郎物語 - 大学編 -』 P95

引用元 井上ひさし『ブンとフン』 P159

引用元 北杜夫『楡家の人びと』 P368

このようなXYXY型は、オノマトペの中で最もよくみられる形態である。そして、このような反復は同じ音や動きが継続したり、複数回繰り返されていたりすることを表している。これも『擬音語擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』で確かめることができる。

「ぱくぱく ① さま 小魚などが、しきりに口を開け閉めするさま。歌わないで口を開け閉めするさま。」<sup>29</sup>

引用元 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』 P330-331

ただし、実際の音や運動が三回以上繰り返されている場合も、オノマトペの形としてはXYXY型の同じ言葉が二回繰り返るものであることが大半である。そもそも「ばかばかばかっ」など語根を三回繰り返すオノマトペも、三回繰り返す動きにしか使えないというわけではないので、この場合の反復は実際の音や動きの反復の回数とは関係がない。

また同じ継続でも、この後取り上げる長音に比べて長い継続を表す傾向があるといえる。は、ば、ば行からは外れてしまうが、「雨がざあざあ降る」と「雨がざーっと降る」を比

26 曾野綾子『太郎物語 -大学編-』（新潮社 1987年5月）P95

27 井上ひさし『ブンとフン』（新潮社 1987年5月）P159

28 北杜夫『楡家の人びと』（新潮社 1977年2月）P368

29 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』（小学館 2007年10月）P330-331

べてみると、雨の降っていた時間が長いのは「ざあざあ降る」の方であるように感じられるのである。ここから、反復によって継続を表す際は、区切りのある一定期間の継続ではなく、明確な終わりがみえずいつまでも同じ音や動きが繰り返されているような継続を表す傾向があると推測できるだろう。

## 5、長音

「港屋の二階に灯が一つついて、汽車の笛がヒューと鳴るとき、おれの乗っていた舟は磯の砂へざぐりと、舳をつき込んで動かなくなった。」<sup>30</sup>

「心地よく腹の底まで吸うてプーと吐き出す。」<sup>31</sup>

引用元 夏目漱石『坊っちゃん』 P72

引用元 高浜虚子 河東碧梧桐『高浜虚子 河東碧梧桐集』 「欠び」 P110

長音は音や動作が一定期間継続するというを表す。用例のように語根に長音のみがついた形で用いられるのはまれであり、「ぱーっ」や「ぱーん」など促音や撥音がついたり「はーはー」など反復系が用いられったりする場合がよくみられる。また、先に述べたように、今回分析対象としたオノマトペの中には、CVCVタイプで促音や撥音の伴わない長音化は一語しかみられなかった。

ここまで、オノマトペに特徴的に現れる特殊モーラや、リ音、反復形が音象徴にどのような影響を与えるのかということを見てきた。そして、それらはオノマトペが表現する音・動作の早さや継続時間、繰り返しの回数などを指し示す効果を持っていることがわかってきた。つまり、特殊モーラや、リ音、反復系は、語根につくことで、語根が表す出来事がどのような風に起こっているのかということを示す効果があるといえる。

さて、ここからは、オノマトペの語根に目を向けて、音や動作を表す、は、ば、ぱ行の音が持つ音象徴について考えていきたい。

### 第三節 濁音化、半濁音化による音象徴の変化

今節は、は、ば、ぱ行に含まれる音の音象徴を明らかにすることを目的としているが、はじめから一文字ずつを扱うのではなく、まずはそれぞれの行ごとの音象徴の違いをみていくことにする。なぜなら、はとばとぱなどの清音と濁音と半濁音はオノマトペを作るうえで対応関係にあると考えられる部分が多々あるからである。例えば、驚いたとき体を強

30 引用元 夏目漱石『坊っちゃん』（角川文庫 1955年1月）P72

31 引用元 高浜虚子 河東碧梧桐『高浜虚子 河東碧梧桐集』 「欠び」（筑摩書房 1967年5月）P110

張らせる動きを表現する「ひくっ」「びくっ」「ぴくっ」などは同じ出来事を表すが、その表す出来事には細かなニュアンスの違いがあるように感じられるだろう。そしてそれは、は行以外のオノマトペ（同じ転がるという動きを表す「ころころ」と「ごろごろ」など）にもいえることである。今回は、清音、濁音、半濁音の三つの形をもつオノマトペを比較して、清音と濁音、そして、は行のみにみられる半濁音が持つ音象徴を考えていくことにしたい。

今回分析対象としたオノマトペの中で、語頭の音のみが清音、濁音、半濁音と変化してオノマトペが作られる語根（「ひくっ」「びくっ」「ぴくっ」における「ひく」のこと）は89種類みられた。それぞれが清音、濁音、半濁音という三つの派生を持つことを考えると、それらの語根によって作られるオノマトペの数は267語であり、分析対象としたオノマトペ925語のうちの約29%にあたる。

また、清音の形が見られない語根（「ばかっ」と「ぱかっ」など）も146種類あり、こちらも二つずつ派生があることを考えると、292語のオノマトペが作られていることがわかる。この濁音と半濁音のみで対応したオノマトペの総数が、清音、濁音、半濁音の三つで対応しているオノマトペより多いということから、ば行とぱ行は対応しやすく、は行は他二行に比べて独立性が高いと考えられるだろう。これは /h//b//p/ の発音上の違いにも関わってくるので後に取り上げることにする。

ただ、濁音と半濁音で対応しているオノマトペと、清音、濁音、半濁音の三種類の形を持つものを合わせると559語となり、今回分析対象としたオノマトペ全体の約60%にあたる。少数だが、清音と濁音のみ、清音と半濁音のみがみられる語根も存在したので、それらも合わせると、は、ば、ぱ行のオノマトペの半数以上は各行にわたって対応する形もっているということができよう。

次のページに、清音、濁音、半濁音の三種類の形を持つオノマトペをまとめて掲載している。

清音	濁音	半濁音	清音	濁音	半濁音
はーっ	ばーっ	ぱーっ	ふよふよ	ぶよぶよ	ぷよぷよ
はきはき	ばきばき	ぱきぱき	ふらっ	ぶらっ	ぷらっ
はたっ	ばたっ	ぱたっ	ふらふら	ぶらぶら	ぷらぷら
はたはた	ばたばた	ぱたぱた	ふらりふら り	ぶらりぶら り	ぷらりぷら り
はたり	ばたり	ぱたり	ふるふる	ぶるぶる	ぷるぷる
はたりはた り	ばたりばた り	ぱたりぱた り	ふん	ぶん	ぷん
はっ	ばっ	ぱっ	ふんふん	ぶんぶん	ぷんぷん
はっはっ	ばっばっ	ぱっぱっ	へーへー	べーべー	ぺーぺー
はらっ	ばらっ	ぱらっ	へかへか	べかべか	ぺかぺか
ひー	びー	ぴー	へこへこ	べこべこ	ぺこぺこ
ひーひー	びーびー	ぴーぴー	へたっ	べたっ	ぺたっ
ひーん	びーん	ぴーん	へたへた	べたべた	ぺたぺた
ひくっ	びくっ	ぴくっ	へたり	べたり	ぺたり
ひくひく	びくびく	ぴくぴく	へちゃっ	べちゃっ	ぺちゃっ
ひくり	びくり	ぴくり	へちゃへ ちゃ	べちゃべ ちゃ	ぺちゃぺ ちゃ
ひしひし	びしびし	ぴしぴし	へったり	べったり	ぺったり
ひたひた	びたびた	ぴたぴた	へったり	べったり	ぺったり
ひっ	びっ	ぴっ	へっへっ	べっべっ	ぺっぺっ
ひったり	びったり	ぴったり	へとへと	べとべと	ぺとぺと
ひひひ	びびび	ぴぴぴ	へらっ	べらっ	ぺらっ
ひやひや	びやびや	ぴやぴや	へらへら	べらべら	ぺらぺら
ひゅー	びゅー	ぴゅー	へろへろ	べろべろ	ぺろぺろ
ひゅー ひゅー	びゅーびゅー	ぴゅーぴゅー	ほーっ	ぼーっ	ぽーっ
ひゅーん	びゅーん	ぴゅーん	ほーほー	ぼーぼー	ぽーぽー
ひゅっ	びゅっ	ぴゅっ	ほかほか	ぼかぼか	ぽかぽか
ひゅん	びゅん	ぴゅん	ほくほく	ぼくぼく	ぽくぽく
ひゅんひゅ ん	びゅんびゅ ん	ぴゅんびゅ ん	ほこっ	ぼこっ	ぽこっ
ひらっ	びらっ	ぴらっ	ほこほこ	ぼこぼこ	ぽこぼこ
ひらひら	びらびら	ぴらぴら	ほそほそ	ぼそぼそ	ぽそぼそ
ひらり	びらり	ぴらり	ほたほた	ぼたぼた	ぽたぽた
ひりっ	びりっ	ぴりっ	ほっ	ぼっ	ぽっ

ひりひり	びりびり	ぴりぴり	ほっかり	ぼっかり	ぽっかり
ひりり	びりり	ぴりり	ほっくり	ぼっくり	ぽっくり
ひん	びん	ぴん	ほっこり	ぼっこり	ぽっこり
ひんひん	びんびん	ぴんぴん	ほったり	ぼったり	ぽったり
ふい	ぶい	ぷい	ほつつり	ぼつつり	ぽつつり
ふー	ぶー	ぷー	ほってり	ぼってり	ぽってり
ふーふー	ぶーぶー	ぷーぷー	ほつほつ	ぼつぼつ	ぽつぽつ
ふかふか	ぶかぶか	ぷかぷか	ほつり	ぼつり	ぽつり
ふくふく	ぶくぶく	ぷくぷく	ほとほと	ぼとぼと	ぽとぽと
ふすふす	ぶすぶす	ぷすぷす	ほやほや	ぼやぼや	ぽやぽや
ふっ	ぶっ	ぷっ	ほろっ	ぼろっ	ぽろっ
ふつつり	ぶつつり	ぷつつり	ほろほろ	ぼろぼろ	ぽろぼろ
ふつつつ	ぶつつつ	ぷつつつ	ほろり	ぼろり	ぽろり
ふつり	ぶつり	ぷつり			

#### 濁音化による効果

まずは清音・半濁音と濁音を比較し、濁音化が音象徴に与える影響について考えることにしたい。

濁音化が音象徴に与える影響として考えられるものに以下の五つがあげられる。

- 1、動作の対象が重い・大きいことを表す
- 2、にぶい音・低い音を表す
- 3、動作が活発・動作の程度が激しいことを表す
- 4、不快感を表す
- 5、重量感を表す

#### 1、動作の対象が重い・大きいことを表す

ば行のオノマトペは、は行やぱ行のオノマトペに比べて、そのオノマトペが表す出来事に関係するものが重いものや大きいものである場合がよくみられる。例えば、水を打つ音や様子を表すオノマトペである「ばちやり」「ぱちやり」の用例を比べてみる。

「太郎は、石坂を引きこんで、水をばしやりと浴びせた。」<sup>32</sup>

「その鯉が五分に一度位は必ず高い音を立ててばしやりと水を打つ。」<sup>33</sup>

32 曾野綾子『太郎物語 -大学編-』（新潮社 1987年5月）P502

33 夏目漱石『思い出す事など：他七篇』（角川文庫 1986年2月）P75

引用元 曾野綾子『太郎物語 - 大学編 -』P502

引用元 夏目漱石『思い出す事など：他七篇』P75

上記の用例は共に、ある対象が水を打つ音や様子をオノマトペを用いて描いている。しかし「ばしゃり」が使われる際の対象は人であり、「ばしゃり」が使われる際の対象は鯉である。そして当然、鯉より人間の方が重く大きい。このように、ば行のオノマトペが使われるときは、は行やぱ行のオノマトペに比べて、動作に関係するものが重いものや大きいものになっていることがみてとれる。

ここからは更に用例を増やして、他の用例でも濁音化がオノマトペが表す動作の対象の大きさや重さに影響を与えているのか確認したい。

今回は小説 404 作品から先ほどのように水を打つ音や様子を表している、は、ば、ぱ行のオノマトペが使われている箇所を抜粋した。（404 作品の作品名は、巻末表 1 を参照）そして、それぞれの用例において対象となっているものの重さや大きさを小、中、大に分類した。

重さの分類基準は、大：人体以上の重さ 中：両者の中間 小：人が片手で持ち上げられる重さ。大きさの分類基準は、大：人体以上の大きさ 中：両者の中間 小：人の片手におさまる大きさ、としている。（重さ、大きさともに対象が不明のものは不明としている）

以下に、対象作品にみられた水を打つ音や様子を表しているオノマトペ。そして、対象を重さと大きさという観点で分類したものをあげる。

用例がみられたオノマトペ（同じオノマトペで複数の用例がみられたものもある）			
ばしゃ	びしゃびしゃ	ぴちゃぴちゃ	ぽちゃり
ばしゃり	びしゃり	ぼしゃぼしゃ	ぽちゃぽちゃ
ばちゃばちゃ	びしゃりびしゃり	ぼちゃぼちゃ	
ばちゃーん！	びしゃ	ぼちゃん	
びしゃびしゃ	ぴちゃり	ぼちゃぼちゃ	

今回、水を打つ音や様子という観点では、ば、ぱ行のオノマトペが用いられている用例は41例みられた。これ以降は、同じ語根のオノマトペを一つのグループとし、それぞれの用例における対象の重さと大きさの分類を行ったものを示す。

#### 対象の重さの分類

語根	小	中	大	不明	全体
ばしゃ	1	1	1	1	4
ばしゃ		1			1
ばちゃ				1	1
ぱちゃ	1				1
びしゃ		1		4	5

ぴしゃ	2	2		1	5
ぴちゃ	5	4		2	11
ぼしゃ		1			1
ぼちゃ		2	1	2	5
ぽちゃ	1	6			7
全体	10	18	2	11	41

#### 対象の大きさの分類

語根	小	中	大	不明	全体
ばしゃ	1	1	1	1	4
ぼしゃ		1			1
ばちゃ				1	1
ぽちゃ	1				1
びしゃ	1			4	5
ぴしゃ	2	2		1	5
ぴちゃ	5	4		2	11
ぼしゃ		1			1
ぼちゃ		2	1	2	5
ぽちゃ	2	5			7
全体	12	16	2	11	41

まず重さについては、ば行オノマトペ16語中 小 1語（6%）中 5語（31%）大 2語

（13%）不明 8語（50%）であった。比較のためにば行オノマトペの結果も示すと、25語中 小 9語（36%）中 13語（52%）大 0語（0%）不明3語（12%）である。

大きさについては、ば行オノマトペ16語中 小 2語（13%）中 4語（25%）大 2語（13%）不明8語（50%）。ば行オノマトペ25語中 小 10語（40%）中 12語（48%）大 0語（0%）不明3語（12%）であった。

ここからも、ば行オノマトペではば行オノマトペに比べて重く大きな対象が表現されやすいことが読み取れるだろう。つまり、濁音の音象徴の一つに、重く大きなものを表現するというものが含まれていると考えられる。

#### 2、にぶい音・低い音を表す

擬音語の場合、濁点は清音や半濁音に比べて低い音を表現する際に使われる。

例えば、「ポーッと汽笛が鳴る」と「ぽーッと汽笛が鳴る」という二つの文章を比較してみると、濁点オノマトペの方が低い音を表している印象を受けることが読み取れるだろう。



「ぼーっ」と「ぼーっ」の二つのオノマトペは、『擬音語擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』で次ページのように書き分けられている。

「ぼーっ ① 音 低くひびく汽笛などの音」<sup>34</sup>

「ぼーっ ① 音 蒸気による汽笛、警笛などの高く鳴りひびく音。」<sup>35</sup>

引用元 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』 P431 P432

他にも、このように音の高低でば行オノマトペとは行やば行オノマトペの意味が書き分けられているオノマトペが存在する。（息を吹き出す音を表す「ぶっ」と「ぷっ」など）そして、その場合決まれば行オノマトペの方が低い音を表現することになっているのである。

ば行オノマトペと低い音が結びつく理由としては、無声音である /p/ と有声音である /b/ の音声的な違いが関係していると思われるが、これについては次章以降で取り上げることとする。とにかく、擬音語における濁音の音象徴には、清音や半濁音に比べて低い音を表すというものがあるといえるだろう。

### 3、動作が活発・動作の程度が激しいことを表す

今回分析対象としたオノマトペの中で一番多くみられたのがこのパターンであった。濁音化すると、は行やば行のオノマトペに比べて、表現する音や動作が強くなったり激しくなったりするというものである。例として以下のようなものがみられた。

「彼は八畳の座敷の真中に小さな餉台を据えてその上で朝から夕方までノートを書いた。丁度極暑の頃だったので、身体の強くない彼は、よく仰向になってぱたりと畳の上に倒れた。」<sup>36</sup>

「時に燃え尽した灰がぱたりと、棒のまま倒れる」<sup>37</sup>

引用元 夏目漱石『道草』 P142

引用元 夏目漱石『虞美人草』 P477

この二つのオノマトペは共に倒れるという動作を表現している。しかし「ぱたり」の方が倒れる勢いや倒れた時の衝撃の大きさが強いような印象を受けるのではないだろうか。

34 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』（小学館 2007 年 10 月） P431

35 同上 P432

36 夏目漱石『道草』（新潮社 1969 年 2 月） P142

37 夏目漱石『虞美人草』（新潮社 2010 年 5 月） P477

先ほど同じように辞典における書き分けを確認してみると「ばたり」の方が動作の勢いが大きいときに使われるオノマトペであるとされていることがわかる。

「ばたり ① 音・さま ものが当たったり勢いよく倒れたりする音。また、そのさま」<sup>38</sup>

「ぱたり ① 音・さま ものが軽くぶつかったり軽いものが落ちる音。また、そのさま」<sup>39</sup>

引用元 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』 P337 P338

ここからも、濁音がつくことでオノマトペが表現する音や動作の勢いや程度が増すことが読み取れるだろう。

ではなぜ、このような音象徴の変化が生じるのか。それは、先に述べた濁音の音象徴が与える動作の対象への影響が関係していると考えられる。

先ほど、ば行オノマトペで表現される音や動作の対象には、重く大きいものがよくみられるということを取りあげた。「ばたり」と「ぱたり」の用例でも、「ばたり」が人が倒れる様子を表現しているのに対して「ぱたり」で倒れているのは燃え尽きた線香であることから、ここでもば行オノマトペの方が、重く大きいものを対象としているということが出来るだろう。そして、当然のことだが、重く大きいものを動かすには強い力が必要である。そのため、重く大きい対象に影響を与える濁点オノマトペは、その出来事の発生までに他のオノマトペに比べて強い力がかかることになるといえる。

その強い力は、実際の出来事になるときに音や動作の勢いの良さや程度の激しさとして表出してくる。それが「ばたり」のように、濁音がつくことでオノマトペが表現する音や動作が強くなったり激しくなったりする原因の一つなのだと推測される。

#### 4、不快感を表す

濁音がつくことで、不快感など否定的な印象を持つようになるオノマトペもある。

例えば「ぺろり」と「べろり」を比較してみる。

「あるときまた隠坊さんがたった一人でぐつぐつなにか煮ているのを見かけて、桃子がそばへ行ってみると、彼は鍋から湯気のたった肉の小片を割箸でつまみ、ぺろりと食べてみせて言った。」<sup>40</sup>

「よく彼女は廊下でビスケットを齧っていた。そのビスケットを半分に割ってやはりむっとしたような顔つきで藍子に与え、いやに長い赤い舌をべろりと出して口端を嘗めた。

38 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』（小学館 2007 年 10 月） P337

39 同上 P338

40 北杜夫『楡家の人びと』（新潮社 1977 年 2 月） P89

その長い赤い舌が現われると、濃い口紅までが色褪せて見えた。」<sup>41</sup>

引用元 北杜夫『楡家の人びと』 P89 P289

ここにみられる「ぺろり」と「べろり」は共にものを食べる様子を表している。そのなかでも「べろり」という表現はビスケットをなめる女の不気味で怪しい様子を印象づけているといえるだろう。上記の二つの用例が同じ作品にみられるものであることから、作者が意図的に二つのオノマトペを使い分けていることがわかる。では、他のば行オノマトペにも同じように否定的な印象を与える傾向があるのだろうか。それを考えるにあたっては『擬音語擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』の各オノマトペの解説文を参考にした。上記の辞典のオノマトペの解説には、オノマトペによって与えられる否定的な印象が「不快な様子」などの言葉で表され、意味の書き分けに用いられている。ここからは『擬音語擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』の、は、ば、ば行の項目から、否定的な印象を表す言葉が含まれているオノマトペの解説文を抜き出し、それがどのオノマトペの解説文なのかを調べることで、濁点オノマトペに否定的な印象を与えるという音象徴がみられるのかということを考えていきたい。

今回、否定的な印象を表す言葉として「不快」「だらしない」「気持ち悪い」「みっともない」「汚い」「嫌な」「見苦しい」を選択した。以下がその結果である。

「不快」が解説文に含まれるオノマトペ

「びーびー」「びちゃびちゃ」「びっとり」「びらっ」「ぶくぶく」「べたべた」「べちょべちょ」「べっとり」

「だらしない」が解説文に含まれるオノマトペ

「びらっ」「びろん」「ぶわぶわ」「べたっ」「べらり」「べろり」「べろんべろん」

「気持ち悪い」が解説文に含まれるオノマトペ

「べとべと」「ぼかぼか」

「みっともない」が解説文に含まれるオノマトペ

「ぶかぶか」「べっとり」「ぼさぼさ」

「汚い」が解説文に含まれるオノマトペ

「べっ」「べったり」「べっべっ」「べとり」

「見苦しい」が解説文に含まれるオノマトペ

「ぶってり」「ぶらしゃら」「ぼっこり」「ぼてっ」

41 同上 P289

このように、今回の場合は否定的な印象を表す言葉が解説文に含まれるオノマトペは全てば行オノマトペであった。ここから、ば行オノマトペがは行やぱ行オノマトペに比べて否定的な印象を表しやすいというのは、特定の語だけでなく、は、ば、ぱ行全体のオノマトペに当てはまることだと推測できる。また、この傾向は、は、ば、ぱ行以外のオノマトペにも当てはまるのだろうか。次ページの例から考えてみたい。

「パサつき・広がり気になる方に  
重くならず毛先まで軽やかに  
「しっとりまとまる」髪が続く」<sup>42</sup>

「寒い冬なのに足裏が汗でしっとり！冬の汗は不可解ですよ。」<sup>43</sup>

引用元「TSUBAKI」

引用元「四季折々 How to do」

ここで用いられている「しっとり」は理想的な髪の様子を表現しているのに対して、「しっとり」は汗ばんで不快な様子表現しているといえるだろう。このように、濁音と否定的なイメージのつながりは、ば行以外のオノマトペにもみられるのである。

## 5、重量感を表す

1で述べたが、ば行オノマトペには重量があつたり大きかつたりするものを動作の対象にしているものがよくみられる。それに加えて、ば行オノマトペは対象が同じものであっても、動作やその対象に重量感があるように感じさせることがある。

例えば「水がぼとぼと落ちる」と「水がぽとぽと落ちる」を比較してみると、その違いがよくわかるのではないだろうか。両方とも落ちるという同じ動作を表現しており、その対象も水滴という同じものである。ただ「ぼとぼと」の方が大きな水滴が重たげに落ちている印象を受けるのではないだろうか。

同じような例として「ぼろぼろ涙をこぼす」と「ぼろぼろ涙をこぼす」もあるが、こちらも「ぼろぼろ」の方が流れる涙の勢いが強く、重たげに滴が落ちている印象を受ける。

このように、ば行オノマトペには同じ動作と対象を表す場合でも、は行やぱ行オノマトペに比べてその動作や対象を重たげにみせるという音象徴があるということが出来るだろう。

42 「TSUBAKI」 (<https://www.shiseido.co.jp/tsubaki/products/moist.html>) 最終閲覧日 2019年1月30日 11:25

43 「四季折々 How to do」 (<https://rarara-ran.com/952.html>) 最終閲覧日 2019年1月30日 11:26

## 半濁音化の効果

ここまでは、は行・ば行オノマトペとぱ行オノマトペを比較して、濁音が音象徴に与える影響を考えてきた。ここからは、は行・ば行オノマトペとぱ行オノマトペを比較して半濁音が音象徴に与える影響をみていくことにする。

半濁音が音象徴に与える影響として考えられるものに以下の五点があげられる。

- 1、動作の対象が軽い・小さいことを表す
- 2、鋭い音・高い音を表す
- 3、動作がわずか・小さいことを表す
- 4、好意的な印象を表す
- 5、軽量感を表す

### 1、動作の対象が軽い・小さいことを表す

ば行オノマトペでは、動作の対象として重い・大きいものを表す効果があるとしていたが、半濁点オノマトペは軽く、小さなものを対象として表している。

「ぶくぶくと泡が二つ浮いて、すぐ消えた。」<sup>44</sup>

「ぶくぶく泡リンスインシャンプー」<sup>45</sup>

引用元 夏目漱石『草枕』 P150

引用元 「片っ端から口コミ集めてみました」

この用例は、泡ができる様子を二つのオノマトペで表現しているのだが、生まれる泡の大きさを比較すると両者の間に差があることが読み取れる。「ぶくぶく」の用例は、池などの水面に、肉眼ではっきり二つと確認できる大きさの泡が浮いている様子を描いている。それに対して「ぶくぶく」の用例は、きめ細かい泡が集まってムースのようになった状態で出てくるシャンプーの広告である。

もし、シャンプーの広告が「ぶくぶく泡リンスインシャンプー」であつたら読み手が与えられる印象はどのように変わるだろうか。少なくとも、きめ細かい泡がボトルから出てくる印象は受けられないだろう。

ぱ行オノマトペが動作の対象へ与える影響をより詳しくみるために、先に用いた、水を打つ音や様子を表しているオノマトペを、その対象の重さと大きさで分類した表を再び用いることにする。

44 夏目漱石『草枕』（小学館 2011年7月）P150

45 「片っ端から口コミ集めてみました」（<https://online-reviews.net/31153>）最終閲覧日 2019年1月30日 11:28

対象の重さの分類

語根	小	中	大	不明	全体
ばしゃ	1	1	1	1	4
ばしゃ		1			1
ばちゃ				1	1
ばちゃ	1				1
びしゃ		1		4	5
びしゃ	2	2		1	5
びちゃ	5	4		2	11
ぼしゃ		1			1
ぼちゃ		2	1	2	5
ぼちゃ	1	6			7
全体	10	18	2	11	41

対象の大きさの分類

語根	小	中	大	不明	全体
ばしゃ	1	1	1	1	4
ばしゃ		1			1
ばちゃ				1	1
ばちゃ	1				1
びしゃ	1			4	5
びしゃ	2	2		1	5
びちゃ	5	4		2	11
ぼしゃ		1			1
ぼちゃ		2	1	2	5
ぼちゃ	2	5			7
全体	12	16	2	11	41

対象の重さについては、ば行オノマトペ16語中 小 1語(6%) 中 5語(31%) 大 2語(13%) 不明 8語(50%) ば行オノマトペ 25語中 小 9語(36%) 中 13語(52%) 大 0語(0%) 不明 3語(12%) である。

大きさについては、ば行オノマトペ16語中 小 2語(13%) 中 4語(25%) 大 2語(13%) 不明 8語(50%)。 ば行オノマトペ25語中 小 10語(40%) 中 12語(48%) 大 0語(0%) 不明 3語(12%) である。

ここからも、ぱ行オノマトペではば行オノマトペに比べて軽い、小さい対象を表すという音象徴があるといえることができるだろう。

## 2、鋭い音・高い音を表す

ば行オノマトペに比べてぱ行オノマトペが高音を表すというのは、ぱ行オノマトペの2の項目でとりあげた。そのためここからは、は行、ば行、ぱ行の三つのオノマトペを比較し、それぞれのオノマトペが音の高低や鈍さ・鋭さという観点でどのような関係にあるのかをみていくことにする。

例として再び、汽笛の音を表す「ほーっ」「ぼーっ」「ぽーっ」を用いる。この三語は『擬音語擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』で以下のように解説されている。

「ほーっ ① 音・さま 汽笛の音。」<sup>46</sup>

「ぼーっ ① 音・さま 低くひびく汽笛などの音。」<sup>47</sup>

「ぽーっ ① 音・さま 蒸気による汽笛、警笛などの高く鳴り響く音。」<sup>48</sup>

引用元 小野正弘『擬音語擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』 P431 P432

ここからわかるように、表現される音は濁音、清音、半濁音の順番に高くなっている。

これらの違いも、ぱ行オノマトペとば行オノマトペが表す音の違いと同じように / h // p / ・ / b / の音声的な違いが関係していると思われるが、次章以降で取り上げることにする。

## 3、動作がわずか・小さいことを表す

ば行オノマトペでは表現される動作が活発になったり、動作の程度が激しくなったりするということを述べたが、ぱ行オノマトペでは、表現される音や動作が小さかったりわずかだったりすることを示すことがある。

「貞行の声は落ちついていた。それがトセの激怒を買った。トセの体がぶるぶるとふるえた。」<sup>49</sup>

「下唇がぶるぶる震えて来て、涙が眼からあふれて落ちた。」<sup>50</sup>

46 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』（小学館 2007 年 10 月）P431

47 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』（小学館 2007 年 10 月）P432

48 同上 P432

49 三浦綾子『塩狩峠』（新潮社 1987 年 2 月）P30

50 太宰治『斜陽』（新潮社 2003 年 5 月）P14

引用元 三浦綾子『塩狩峠』 P30

引用元 太宰治『斜陽』 P14

「ぶるぶる」と「ぷるぷる」のオノマトペは共に震えるという動作を表現している。

しかし「ぶるぶる」の用例では、人間の身体中が震えていることを表現しているにも関わらず、「ぷるぷる」の用例で震えているのは下唇だけである。ここからも、同じ動作を表現する際は、ば行オノマトペが用いられる場合の方が、小さい動作を表現することが読み取れる。

これは、辞典の解説文における意味の書き分けからも確認できる傾向である。

「ぶるぶる ① 音・さま ものが破れこわれたり、はげしくふるえたりする音。」<sup>51</sup>

「ぷるぷる ① さま こまかくふるえるさま。」<sup>52</sup>

引用元 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』 P408

引用元 同上 P409

このように、ば行オノマトペの解説文には「こまかく」「わずかに」などの言葉で他のオノマトペとの意味を書き分けているものがみられる。そして、そのような音象徴の違いは、ば行オノマトペと同じように動作の対象の違いから生まれると推測される。

ば行オノマトペは他のオノマトペに比べて、対象を軽い・小さいものとするということは先に述べた。そして、軽く小さいものは少量のエネルギーで簡単に影響を受けてしまう。そのため、ば行オノマトペで表現されるような動作には強い力が必要とされず、自然に少量の力によって引き起こされる小さくわずかな動きを表すことになっていくのである。

#### 4、好意的な印象を表す

濁音化についての項目では、ば行オノマトペに不快な印象を与える音象徴があるということを取りあげた。では、ば行オノマトペにもそのような特定の感覚と結びつくような音象徴がみられるのだろうか。

「またずいぶん肥ったね。……またなんて……どうしてそんなにぶくぶく肥ったの？」<sup>53</sup>

「君、『テーブル』が一畳敷もあらうかと思はれる位大きくて、其上には青い織物が掛けでもあるし、肘突なんかもあるし、腰掛には空気枕のやうなやつが付いて、所長の留守に

51 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』（小学館 2007 年 10 月）P408

52 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』（小学館 2007 年 10 月）P409

53 北杜夫『楡家の人びと』（新潮社 1977 年 2 月）P570



一寸乗って見ると——ぶく〜<sup>4</sup> してみて、工合のいゝことゝ言つたら。」<sup>54</sup>

引用元 北杜夫『楡家の人びと』 P570

引用元 島崎藤村、北村透谷『島崎藤村・北村透谷』「藁草履」 P23

ここで用いられている「ぶくぶく」と「ぷくぷく」は柔らかくふくらんでいるさまを表現したオノマトペだが、「ぶくぶく」は「そんなに」という言葉から太っていることを否定的に捉えていることがわかる。それに対して「ぷくぷく」は椅子の柔らかさを「工合のいい」と好意的に捉えている。ここから、同じ様子を表現するときもば行オノマトペが否定的な印象を与えるのに対して、ぱ行オノマトペは好意的な印象を与えることがわかる。

では、ば行オノマトペと同じように『擬音語擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』の各オノマトペの解説文を用いて、他のぱ行オノマトペに同じような傾向があるのかについてみていくことにする。

今回、好意的な印象を表す言葉として「かわいい」「おだやか」「愛らしい」を選択した。以下がその結果である。

「かわいい」が解説文に含まれるオノマトペ

「ぷく」「ぼっちゃり」

「おだやか」が解説文に含まれるオノマトペ

「ほかほか」「ほかほか」「ほっくり」「ほのぼの」

「愛らしい」が解説文に含まれるオノマトペ

「ぼちゃっ」「ぼってり」

このように、解説文に先の三つの言葉がみられるオノマトペの中でもば行オノマトペは全体の63%を占めている。ば行オノマトペと否定的な印象の結びつきほどではないが、ぱ行オノマトペと好意的な印象の間にも結びつきがあると考えられるだろう。

## 5、軽量感を表す

先ほどは「ぼとぼと」と「ぽとぽと」や「ぼろぼろ」と「ぼろぼろ」などば行オノマトペとぱ行オノマトペを比較することで、ぱ行オノマトペが動作や対象を重たげにみせることがあるということ述べた。しかし、それは言い換えると、ぱ行オノマトペは、ば行オノマトペに比べて動作や対象を軽くみせることがあるともいえるということではないだろうか。それを明らかにするために、ぱ行オノマトペの項目では用いなかった「べたべた」と「ぺたぺた」というオノマトペを例として取り上げてみる。

54 島崎藤村、北村透谷『島崎藤村・北村透谷』「藁草履」（筑摩書房 2002 年 12 月）P23

「あの顔に白粉をべたべたつけて、いやにじゃら～して、厭な女ッたらありゃしないんだものねえ。」<sup>55</sup>

「ナオミはいきなり私の頸にしがみつき、その唇の朱の捺印を繁忙な郵便局のスタンプ掛りが捺すように、額や、鼻や、眼瞼の上や、耳朶の裏や、私の顔のあらゆる部分へ、寸分の隙間もなくぺたぺたと捺しました。」<sup>56</sup>

引用元 田山花袋『生』 P92

引用元 谷崎潤一郎『痴人の愛』 P104

ここにみられる「べたべた」と「ぺたぺた」は顔にものを貼り付けるさまを表したオノマトペである。しかし、「べたべた」に比べて「ぺたぺた」は貼り付く粘度が低く、動きも軽やかな印象を受ける。このように、ば行オノマトペには、オノマトペが表す動作や対象を軽くみせる音象徴がみられるのである。

#### 第四節 子音の音象徴

##### 第一項 /h/の音象徴

ここまで、オノマトペの語根につくことで、語根が表す出来事がどのように起こっているのかということを示す効果がある特殊モーラ、リ音、長音の音象徴や、濁音化や半濁音化によって変化する音象徴についてみてきた。

ここからは、オノマトペに使われる /h/ と /p/・/b/ にみられる音象徴について擬音語と擬態語にわけてそれぞれ考えていくことにする。

そのための方法として、『擬音語擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』の各オノマトペの意味の解説文を用いることにした。まず、文章中に出てくる単語数を計測して頻出単語を抽出することのできるフリーソフト、KHコーダー (<http://kncoder.net/>) を使用し、今回分析対象としたオノマトペの解説文における頻出語を調査する。そして、その結果から各音のオノマトペにみられる意味の傾向を分析し、音象徴を導き出そうと考えた。ここでは、/h/ と /p/・/b/ の三音に共通している特徴をみてから /h/ 音の音象徴について述べていく。

(KHコーダーによる分析結果は、巻末表2～表12に収録)

/h/、/p/・/b/の三音に共通しているのは、解説文に頻出する動詞が共通しているということである。その動詞とは、「落ちる」「動く」「感じる」「打つ」の4語であり、各音における結果は以下の通りである。(語頭の数字は、動詞の出現語数の順位である)

/h/ 1 動く 2 感じる 3 落ちる 14 打つ

/b/ 1 落ちる 2 動く 4 打つ 12 感じる

55 田山花袋『生』(岩波書店 1935年7月) P92

56 谷崎潤一郎『痴人の愛』(新潮社 1985年6月) P104

/ p / 1 落ちる 2 動く 3 打つ 4 感じる

ただし、「動く」は他の三語と違い、「ひきつるのように動く」など実際に / h / や / p / ・ / b / の音と関係していると考えられる動詞（この場合は「ひきつる」）に付属して出現する例が多数みられたため、ここでは取り上げないことにする。

この結果を見る限りは / h / 音だけは他の音と違う傾向があるようだが、は、ば、ぱ行のオノマトペで表される動作には共通している点があるといえる。特に、どの音でも三位以内に数えられる「落ちる」は、は、ば、ぱ行オノマトペと結びつきやすい動詞であるといえるだろう。

実際に、は、ば、ぱ行オノマトペと「落ちる」という動詞がともに使われている例としては以下のようなものがみられた。

「彼が喜びの涙ははらはらと肩の上に落ちぬ。」<sup>57</sup>

「吾輩はぼたりと畳の上へ落ちる。」<sup>58</sup>

「めくらぶどうの藪からはきれいな雫がぼたぼた落ちる。」<sup>59</sup>

引用元 森鷗外『阿部一族；舞姫』P31

引用元 夏目漱石『吾輩は猫である』P55

引用元 宮沢賢治『新編銀河鉄道の夜』「マリヴロンと少女」P107

このように、は、ば、ぱ行は、「落ちる」という共通の動作を表すことがある。このような例と、オノマトペの解説文に用いられる動詞が似た傾向を示していることから、/ h / や / p / ・ / b / 音には「落ちる」や「打つ」などの動作を表す意味があるということができらるだろう。

では、ここから / h / の音象徴を考えていく。

分析対象としたオノマトペ925語の中で、/ h / を語頭にもつ擬音語は69語みられた。

その中で特徴的なのは、人や動物の声を表すオノマトペが37語（約54%）と半数以上を占めていることである。また、声が発生することがなくても、息の音を表すオノマトペも12語（約17%）みられた。（そのうち、声と息の意味が重なって現れているものが5語）

声や息の音を表すオノマトペには以下のような例がみられる。

「古い太い柱が、幾本もそそり立って、ひそひそ話をしている私たちを囲んでいた。」<sup>60</sup>

57 森鷗外『阿部一族；舞姫』（新潮社 2006年4月）P31

58 夏目漱石『吾輩は猫である』（新潮社 2003年6月）P55

59 宮沢賢治『新編銀河鉄道の夜』「マリヴロンと少女」（新潮社 1989年6月）P107

60 三島由紀夫『金閣寺』（新潮社 2003年5月）P106

「ふーっ。狸オヤジめ、どこで手品など仕込んできたのだ」<sup>61</sup>

引用元 三島由紀夫『金閣寺』 P106

引用元 井上ひさし『ブンとフン』 P16

このような声または息の音を表すは行のオノマトペは、今回分析対象としたオノマトペのなかには44語あり、これは全体の約64%にのぼる。

出現頻度表（巻末 表2）をみても、名詞では、二語以上出現している語の70%が声や息に関連する言葉である。（例として、鳴き声、ウマ、キジ、トビ、ホトトギス、泣き声など）サ変名詞でも上位三位（息、呼吸、くしゃみ）が声や息に関連しており、これはサ変動詞全体の約58%を占める。また、動詞も息や声に関係するもの（鳴く、笑う、吹くなど）が全体の30%みられる。しかも動詞の場合は「へつらう声」などというように「声」や「音」などの名詞が付属して息や声を表すことにしている例があるので、実際に息や声を表しているオノマトペは更に多くみられると予測される。

そして、声や息の音の次によくみられるのが風の音を表現するオノマトペである。

風が吹く音を表すオノマトペは7語あり、物体が風をきる音、風が物体に当たる音、風が吹いている音などを表現するオノマトペがみられた。

以下にその用例の一部をあげる。

「境内の銀杏もすっかり葉を落とし  
冬の風がひゅーっと吹き抜けます  
こんな夜は  
シチューでしょう！」<sup>62</sup>

「木の枝やバットなどを振るとヒュンと風を切る音がしますが、素手をいくら素早く振り下ろしても音が出せません。」<sup>63</sup>

引用元 「月のひびき（徳正寺だより）」

引用元 「yahoo 知恵袋」

ここでみられるような風の音を表すオノマトペと、先ほど取り上げた息や声の音を表す

61 井上ひさし『ブンとフン』（新潮社 1987年5月）P16

62 「月のひびき（徳正寺だより）」

(<https://blog.goo.ne.jp/tsukinohibiki/e/4b7042091402f920a1b49ea40e40ca70>) 最終閲覧日 2019年1月30日 11:29

63 「yahoo 知恵袋」

([https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question\\_detail/q1437484729](https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1437484729)) 最終閲覧日 2019年1月30日 11:29

ものを合わせると全体の約74%を占めるまでになる。

このように、は行のオノマトペには息と声、風の音を表現するものがよくみられるのだが、これらに共通するのは、どれも空気の動きに関連した音であるということだろう。

ここから、/h/の音は擬音語として使われる際、空気の動きを意味する音象徴を持っていると推測することができる。

次に/h/が語頭に現れる擬態語についてである。/h/を語頭にする擬態語は217語みられた。

そのなかで、出現頻度表(巻末表3)をみると、「気持ち」や「機嫌」という人間の心に関わる言葉がよく現れていることがわかる。「気持ち」が含まれるのは9語(名詞の項目の約5%)「機嫌」が含まれるのは5語(約3%)であり、特に「機嫌」は、自分の機嫌がいい様子(ほいほい、ほたほた)と人の機嫌をとる様子(へ+長音+カ行かタ行)があるようである。

「気持ち」や「機嫌」と合わせて、名詞Cの項目では「心」という言葉の出現語数の多さ(名詞Cの項目の5%出現語数五位)が目を惹く。なぜ「心」という単語が/h/音に特徴的なのかというと「心」より出現語数の多い4語(「力」「人」「口」「体」)は、濁音や半濁音の擬態語においても5語以上確認されるが、「心」という単語は、濁音で1語、半濁音で4語しかみられないからである。つまり、先ほどの「気持ち」や「機嫌」も加えると、は行のオノマトペには心の動きに関わる意味が多くみられると考えることができる。

しかしその動きは語頭の音によって変わるようで、「は」「ほ」を語頭に置くオノマトペは晴れやかになること(はっきり)だったり、安堵(ほっ)だったり、落ち着く方向を表す。しかし、「ひ」や「ふ」からはじまるオノマトペは不安や恐れ(ひやり)や、落ち着かない状態(ふわふわ)など先ほどとは対照的な意味を表すのである。

「毎日何かにつけて、そんなことを言われますけれど、此節は腹など立たなくなりました。自分をうつ鞭とも考へまして、はっきりした心持で一心に勉強したり家事を手傳つたりして居ります。」<sup>64</sup>

「でも、あたしはお客さまがこなくなっても、ちっともうつろには感じませんよ。ただほっとするだけ。またどうして正月が終るとむなしいの？」<sup>65</sup>

「あの時は愈頭が変になったのかと思って、ひやりとした」と後で兄が私に云った。」<sup>66</sup>

「自分は肺の底が抜けて魂が逃げ出しそうな所を、漸く呼びとめて、多少人間らしい見になって、宿の中へ顔を出したばかりであるから、魂が吸く息につれて、やっと胎

64 島崎藤村『新生 後篇』(岩波書店 1956年1月) P248

65 北杜夫『楡家の人びと』(新潮社 1977年2月) P436

66 夏目漱石『こころ』(新潮社 2004年3月) P148

心に舞い戻っただけで、まだふわふわしている。」<sup>67</sup>

引用元 島崎藤村『新生 後篇』P248

引用元 北杜夫『楡家の人びと』 P436

引用元 夏目漱石『こころ』 P148

引用元 夏目漱石『坑夫』 P62

これらの例のように、は行のオノマトペには心の動きを表すものがよくみられるが、その感情の内容は語頭の音によって変化することがわかるだろう。

また「息」や「呼吸」という言葉は擬音語と同じように高い頻度で出現していたが「声」はあまりみられなかった。「息」は13語（サ変名詞の項目の約12%）「呼吸」は4語（約4%）みられ、割合こそ低いが、サ変名詞の項目の出現語数一位と四位である。

ここから擬音語でみられたような、空気の動きを表す音象徴が擬態語にも影響を与えていることが分かる。

そして、/h/音のオノマトペは形容詞の現れ方が特徴的でもある。

形容詞における出現語数の上位4語は「軽い」「弱々しい」「小さい」「薄い」である。（これだけで形容詞全体の41%を占める）そのなかでも「軽い」「小さい」「薄い」は半濁音の擬態語でもよくみられるが、「弱々しい」は半濁音の擬態語では形容詞の出現語数11位であり、明らかに清音での出現率が高いことがわかる。（清音では形容詞全体の約9% 半濁音では約2%）

/h/音を語頭に持つオノマトペが「弱々しい」様子を表現している例として、以下のようなものがみられた。

「100均で買った多肉植物を育てて約一か月たちました。まったく、枯れることなく育っ

ています。だけど、明らかにひよろひよろ、スカスカ。なんとなく間延びしてしまいました。」<sup>68</sup>

引用元「多肉植物と水やり男子」

この用例における「ひよろひよろ」は、植物が頼りなく弱々しげであることを表している。また「ひよろひよろ」から派生した若者言葉である「ひよろい」が、ただ細いだけでなく筋肉のついていない弱々しい体を表していることから/h/音を持つ「ひよろ」という語根が弱々しい様子と結びついていることが確認できるだろう。これは、力が抜けて弱々しく倒れ込む様子を表す「へたへた」や「へなへな」にもみられる結びつきで

67 夏目漱石『坑夫』（岩波書店 2014年2月）P62

68 「多肉植物と水やり男子」（<https://taniku-succulent.com/blog-entry-14.html>）最終閲覧日 2019年1月30日 11:32

ある。

一方、形容詞Bの項目では「やわらかい」という言葉が出現頻度二位になっている。そのうえ、一位は否定の「ない」なので、動作の状態を表す言葉としては事実上一位といえるだろう。

ここから、は行の擬態語で表されるのは、小さく薄いものが、小さい動きや軽い動きをする様子。または、そのようなものが弱々しげな状態にある様子であると考えられる。

また、「やわらかい」という言葉は「ふくらむ」という動詞と共に現れる例が多くみられた。(ふ+わのオノマトペ)ので、やわらかくふくらんだようすや、先の「弱々しい」と関連した、やわらかさから発生する弱々しさや頼りなさも表すといえる。ちなみに、「やわらかい」という言葉は「ふ」「ほ」から始まるオノマトペの解説文にしかみられず、やわらかくて弱々しいという意味を表していたのは「ふ+にゃ」のみである。

「新聞をどけてしまうと、下にはポリエチレンだか発泡スチロールだかの、子供の小指ほどの大きさのふにゃふにゃとした詰めものがでてきた。」<sup>69</sup>

引用元 村上春樹『村上春樹全作品 1979～1989④世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 P101-P102

以上のように、 / h / を語頭に持つ擬態語には、対象の弱々しさややわらかさを表すものがよくみられるのである。

最後に、は行に特徴的な名詞としては涙や花があげられる。

は、ば、ぱ行は落ちるといふ動詞とつながりやすいことは先に述べたが、は行のオノマトペと「落ちる」といふ動詞が組み合わせられるとき、落ちる対象の限定がみられるのである。

第三節で用いた404作品から、は行のオノマトペを用いて落ちる様子を描いた用例を探し、そこで落ちている対象として描写されているものを抜き出すと、全体の約69%が涙が落ちる様子を、13%が花や葉などの植物が落ちる様子を表していた。両者に、涙と同じ液体である水や雨を含めると、全体の約86%にも及ぶ。ここから、少なくとも「落ちる」といふ動詞と結びつく場合、は行のオノマトペによって描かれるものは涙をはじめとする液体と、花や葉などの植物にほとんど限定されることがわかる。先ほど述べた形容詞もこのようなものを表すことから、弱々しいや軽い、小さい、薄いなどが使われるようになっているのではないだろうか。

## 第二項 / p / ・ / b / の音象徴

分析対象とした925語の中で / b / を語頭にもつ擬音語は180語、 / p / を語頭にもつ擬音語は197語みられた。

第三節では、擬音語では濁音は低音、半濁音は高音を表す傾向がみられる点や、対象の

69 村上春樹『村上春樹全作品 1979～1989世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』(講談社1990年11月) P101-P102

重さや大きさが濁音化や半濁音化に影響を与えているという点を述べた。これは出現頻度表（巻末表4表6）の形容詞の頻出語句の違いからも読み取ることができる。

例えば、濁音擬音語の解説文にみられる形容詞上位五位は「強い」「低い」「重い」「太い」「鋭い」「大きい」（「鋭い」と「大きい」は同数）である。これは形容詞全体の約72%にのぼることからも、これらのイメージが / b / の音にみられることがわかる。

一方、半濁音擬音語の解説文にみられる形容詞上位五位は「軽い」「高い」「鋭い」「細い」「小さい」であった。こちらも形容詞全体の約72%を占める。ここからも / p / の音に軽さや小ささを感じさせる音象徴があることが読み取れるだろう。ちなみに、濁音擬音語と半濁音擬音語、両方の出現頻度表で多くの語数が確認できた「鋭い」は、ば行では形容詞全体の約6%、ぱ行では約10%と、ぱ行オノマトペの方がより解説文への出現頻度が高い。

そして、/ h / の音にはみられず、/ p / と / b / の音にみられるものとして、水に関係するオノマトペが頻繁に作られているということがある。これは出現頻度表（巻末表4・表6）の名詞の項目に特に顕著である。濁音擬音語においては、名詞の項目で「水中」「水面」が上位二語であり、四位にも「液体」という言葉がみられた。また、名詞Cの項目でも「水」が出現語数二位、「泡」が四位に入っている。半濁音擬音語においても、名詞の項目で「水滴」「液体」「水面」が出現語数四位から六位にみられたり、名詞Cの項目で「水」が二位「泡」が九位「雨」が十位にあらわれたりしている。ここから、濁音擬音語と半濁音擬音語のオノマトペの解説文においては、水に関する名詞が比較的多数出現していることがわかるだろう。

水に関する濁音擬音語や半濁音擬音語のオノマトペには以下のようなものがある。

「思い切って飲んでみると、勢よく舌を入れてぴちゃぴちゃやってみると驚いた。」<sup>70</sup>

「それから神楽坂の毘沙門の縁日で八寸ばかりの鯉を針で引っかけて、しめたと思ったら、ぽちゃりと落としてしまったがこれは今考えても惜しいと云ったら、赤シャツは顔を前方へ突き出してホホホと笑った。」

71

引用元 夏目漱石『吾輩は猫である』 P541-P542

引用元 夏目漱石『坊っちゃん』 P59

これらのオノマトペに共通するのは水面を叩いたり、水面に何かが落ちた時の音を表現しているということである。反対に、水滴が地面に落ちる様子を表したり、水面に浮く様子を表したりすることもある。

70 夏目漱石『吾輩は猫である』（新潮社 2003年6月）P541-P542

71 夏目漱石『坊っちゃん』（角川文庫 1955年1月）P59



「下女が三和土の上にぼたぼたと涙を落した。」<sup>72</sup>

「お湯もとろとろ～

体がプカプカ～うくの。」<sup>73</sup>

引用元 夏目漱石『彼岸過迄』 P192

引用元 「パワースポットへ行こう♪ 下川友子オフィシャルブログ」

ここからわかるように、水に関する濁音擬音語や半濁音擬音語のオノマトペというのは、何かの面が関係した動作に伴う音を表しているものであるといえる。例えば「ぼたぼた」の用例は三和土、「プカプカ」の用例では温泉の水面が、その面にあたるといえるだろう。つまり、水というより面に関係したオノマトペなのである。

面が関係したオノマトペの例

「一ダースばかりの凍った海老と牛フィレ肉のかたまりとアイスクリームと最高級のバターと三十センチほどの長さのあるすじこと作りだめしておいたトマト・ソースが、隕石群がアスファルト道路にぶつかるような音をたててばらばらとリノリウム貼りの床に落ちた。」<sup>74</sup>

「葉子が人力車で家を出ようとする、何の気なしに愛子が前髪から抜いて鬢を搔こうとした櫛が、脆くもぼきりと折れた。」<sup>75</sup>

引用元

村上春樹『村上春樹全作品 1979～1989④ 世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』P208

引用元 有島武郎『或る女』 P85

上の例のように、何かの面に物体が落ちたり、面自体が壊れたりするなどの様子を表す動詞「落ちる」「打つ」「当たる」「折れる」「歩く」「切る」などは、濁音擬音語で動詞全体の約44%、半濁音擬音語で動詞全体の46%をしめていることがわかった。このような動詞は、/p/や/b/音が持つ意味の一般的な傾向を表していると思われる出現頻度が高い語の中に含まれやすく、特に、「落ちる」と「打つ」は濁音半濁音ともに動詞の項

72 夏目漱石『彼岸過迄』（岩波書店 1990年4月）P192

73 「パワースポットへ行こう♪ 下川友子オフィシャルブログ」

(<https://ameblo.jp/tomo-chupi/entry-10469295197.html>) 最終閲覧日2019年1月30日 11:34

74 村上春樹『村上春樹全作品 1979～1989④ 世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』（講談社 1990年11月）P208

75 有島武郎『或る女』（新潮社 1995年5月）P85

目の上位二位である。

ここから、この二つは / p / ・ / b / 音を語頭に持つ擬音語オノマトペと特につながりやすい動詞であると考えられることができるだろう。そして「落ちる」「打つ」以外にも「当たる」「折れる」などの動詞が濁音擬音語においても半濁音擬音語においても上位六位以内にみられる。このことから / p / ・ / b / 音を語頭にもつ擬音語では、何かの面に物体が落ちたり当たったりしたり、その面自体が壊れたりする際に発される音が表現されていることが読み取れるだろう。

これに加えて、 / p / ・ / b / 音の音象徴として特徴的なものに「破裂」がある。これは、サ変名詞の項目において、濁音擬音語では三位、半濁音擬音語では二位と両者において高い出現率をみせている言葉である。しかし、それにも関わらず、は行オノマトペの解説文には一度も使用されていない言葉でもある。

/ p / や / b / の音で破裂音を表現したオノマトペには以下のようなものがある。

「突然、ばんっと何かのはじける音がして、運転席の横の小さな物入れのふたが外れて飛び出した！！」<sup>76</sup>

「ばんっっ！」

突然、乾いた破裂音が聞こえた。

「そういや、足元にフロッグを浮かべたままだったっけ。」<sup>77</sup>

引用元「ポカラのほほん日記」

引用元「釣行記」

二つの用例にみられる「ばんっ」と「ばんっ」は破裂音を表現しているといえるが、では、これらのオノマトペが「ばんっ」「ばんっ」と対応するは行オノマトペである「はんっ」であったと考えればどうだろう。

「はんっと何かのはじける音。」「はんっっ！突然、乾いた破裂音が聞こえた。」これらは不自然なオノマトペであると言わざるを得ず、通常はこのような表現は用いない。

つまり、このような破裂音を表現するというのは、 / h / 音にはない / p / ・ / b / 音の音象徴であるといえるのだろう。なぜ / p / と / b / 音のみが「破裂」というイメージとつながるのか。その理由は / h / と / p / ・ / b / の発音方法の違いが影響していると考えられる。これらの違いについては後の第四章で取り扱うこととしたい。

ここまでは擬音語を中心として / p / と / b / の音がもつ音象徴をみてきたが、ここか

76 「ポカラのほほん日記」 (<https://blogs.yahoo.co.jp/chikamum67/59707069.html>)

最終閲覧日 2019年1月30日 11:36

77 「釣行記」 (<http://www.geocities.jp/seabassfisherman2/choukouki20110621.html>)

最終閲覧日 2019年1月30日 11:37

ら擬態語についても同じようにみていくことにする。

分析対象とした925語の中で / b / を語頭にもつ擬態語は308語、 / p / を語頭にもつ擬音語は335語みられた。

こちらも、第三節で述べた動作が活発だったり程度が大きかったりする場合は行オノマトペが使われ、小さい場合はば行オノマトペが用いられるということが、出現頻度表(巻末表5表7)の形容詞の頻出語句の違いから読み取ることができる。濁音擬態語の解説文にみられる形容詞上位五位は「強い」「大きい」「重たい」「重い」「太い」であり、形容詞の項目の約57%を占める。半濁音擬態語では「軽い」「高い」「鋭い」「細い」「小さい」が上位五位にみられ、これは形容詞の項目の約72%である。

また、ば行オノマトペが不快なイメージと、ば行オノマトペが好意的なイメージと結びついているという点も、出現頻度表から確認することができた。

例えば「不快」という言葉は、濁音擬態語においては形容動詞の項目で出現語数二位を示している。他にも、濁音擬態語のオノマトペの解説文には「不機嫌」(形容動詞七位)「見苦しい」(形容詞十位)「悪い」(形容詞十五位)などのように、不快な気持ちを表現する言葉がたびたび現れていることがわかる。

一方、半濁音擬態語の解説文において「不快」は一語もみることができない。「不機嫌」は形容動詞の十六位にみられるが、「悪い」は「わるい」という言葉で一語みられたのみである。その代わりに、形容動詞六位の「元気」や十三位の「きれい」。形容詞二十一位の「愛らしい」など、ば行オノマトペにはあまりみられない好意的な印象を持たせる言葉が並んでいた。ここからも、 / b / ・ / p / の対立が不快かそうではないかという部分にみられることがわかるだろう。

最後に、擬音語と同様に水に関係する名詞の出現語数が多いことを取り上げる。濁音擬態語においては、名詞の項目で「水分」と「液体」が上位二位を占め、五位と六位に「水中」と「水面」がみられた。さらに、半濁音擬態語においては、名詞の項目で「水滴」「液体」「水面」が出現語数の二位から四位になっている。

動詞に関しても「落ちる」「打つ」が濁音半濁音ともに出現語数一位と三位に現れていて、擬態語においても / p / や / b / 音がこれらの動詞と結びつきやすいというのは変わらないようである。つまり、擬音語で描かれたような、何かの表面に物体が影響を及ぼしたり、面そのものに変化がおきたりする様子を擬態語でも表していることがわかる。

## 第五節 母音の音象徴

### 第一項 Edward Sapirの実験

第四節では、 / h / と / p / ・ / b / 音がどのような音象徴をもっているのかを『擬音語擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』の解説文を手がかりに考えた。しかし、「はらはら」の「は」や「べたべた」の「べ」、「ぼたり」の「ぼ」も / h / や / p / ・ / b / 音のみで構成されているわけではない。「は」であれば [ h + a ] 「べ」は [ b + e ] 「ぼ」は [ p + o ] と、子音と母音で構成されているのである。

そして、それらの母音にも音象徴がみられる。そのことがわかるものとして以下のような実験がある。

「For example, the meaningless words mal and mil were pronounced in that order and given the arbitrary meaning 'table.' The subject decided whether mal seemed to symbolize a large or a small table as contrasted with the word mil.」<sup>78</sup>

引用元 Edward Sapir 「A STUDY IN PHONETIC SYMBOLISM」 P227

この実験はアメリカの言語学者Edward Sapirが行ったものであり、被験者は英語圏の人々である。

内容としては、無意味語である「mal」と「mil」が発音され、それは両方とも「机」を意味するということが示された。すると、被験者たちは、「mal」は大きな机で、「mil」は小さな机だと決定したというものである。この場合「mal」と「mil」の違いは使われている母音が「a」であるか「i」であるかのみであり、つまり、被験者が発音の違いから感じた机の大きさの違いは「a」と「i」の音が持つ音象徴の違いによるものだと考えられるのである。

ここからは、このような母音が持つ音象徴について考えていくことにしたい。

そのための方法として、/h//p/・/b/音の音象徴を考えたときと同じように『擬音語擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』の解説文にみられる語を分析し、出現語数を数えていくことにする。それに加えて、先ほどの「mal」と「mil」のように、母音のみが異なるオノマトペの意味を比較していくことも行っていきたい。

では、母音のみが異なるオノマトペとして/p/音を語頭にもち、語根一文字に促音を組み合わせたオノマトペを例にして、その違いをみていくことにする。

「次々と快い音響を立てて、花火がぱつと虚空に菊花の模様をひらき、あるいはおどろくほど夜空一杯にきらびやかな姿態をのぼし、あるいは何遍か色を変じながら釣提燈のようにゆらゆらと降りてきた。」<sup>79</sup>

「それで、手脚が高脚ガニみたいにびつと伸びてるように見えるの」<sup>80</sup>

「坑夫は殻になった煙管をぶつと吹く。」<sup>81</sup>

「その時与吉の鼻の穴が震えるように動いた。厚い唇が右の方に歪んだ。そうして、食いかいた柿の一片をぺつと吐いた。」<sup>82</sup>

78Edward Sapir 「A STUDY IN PHONETIC SYMBOLISM」

([https://pure.mpg.de/rest/items/item\\_2381142/component/file\\_2381141/content](https://pure.mpg.de/rest/items/item_2381142/component/file_2381141/content)) 最終閲覧日 2019年1月30日 11:38 P227

79 北杜夫『楡家の人びと』（新潮社 1977年2月）P308

80 曾野綾子『太郎物語- 大学編-』（新潮社 1987年5月）P413

81 夏目漱石『坑夫』（岩波書店 2014年2月）P245

82 夏目漱石『夢十夜：他二篇』 「永日小品」（岩波書店 1990年11月）P85-P86

「九谷の猪口に何杯目か、ほんのすこしすごした酒の、これがあいにく今日の酒のこと  
で、出所不明の名も無きやつだが、おりよくくちびるの紅にうつって、せめてもの見立はま  
ず伊丹の蘭菊、また八重桜、初紅葉、ぽつと色に出て」<sup>83</sup>

引用元 北杜夫『楡家の人びと』 P308

引用元 曾野綾子『太郎物語 - 大学編 - 』 P413

引用元 夏目漱石『坑夫』 P245

引用元 夏目漱石『夢十夜：他二篇』 「永日小品」 P85-P86

引用元 石川淳『石川淳集』 「処女懐胎」 P309

これらは全て / p / + 母音 + 促音で構成されたオノマトペであるが、母音が異なるだけでこれだけの意味の違いがみられるのである。

## 第二項 / a / の音象徴

まずは / a / 音がみられる「ぱっ」からみていくことにする。上記の用例では「ぱっ」は花火が広がる様子を描くオノマトペとして用いられているが『擬音語擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』における解説文は以下の通りである。

「ぱっ ① さま 軽やかに勢いよくあたりへ広がるさま。」<sup>84</sup>

引用元 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』 P340-P341

このように「ぱっ」は「軽やかに」「勢いよく」「広がる」様子を表しているオノマトペなのだが「軽やかに」は半濁音である / p /、「勢いよく」は一瞬の様子を表現する促音がつ音象徴によるものだと考えられる。そのようになると、母音 / a / が関係しているのは「広がる」の部分であると考えられるだろう。

語頭の文字に / a / 音を持つオノマトペ（以下 / a / オノマトペとする。他の母音も同様）の解説文内で登場した語の出現頻度表（巻末 表 8）からも、名詞の項目の三位に「広がり」、動詞の項目の六位から八位に「開く」「広がる」「散る」がみられることなど、同じような傾向が読み取れる。これは、/ a / オノマトペは、広がる様子を表すものがよくみられるということであるといえるだろう。他の母音の出現頻度表をみても / i / では「広がる」が 1 語、/ u / では「広い」が 3 語、/ e / では「広がる」3 語「広い」2 語、「散らす」が 4 語、/ o / では「開く」2 語、「散らばる」5 語がみられたが、これら全ての語を合計しても20語にしかならず、先ほどあげた / a / オノマトペの「広がり」「開く」「広がる」「散る」の4語の合計47語の半数以下でしかない。加えて、上記の4語以外にも「飛び散る」や「散らばる」など広がる様子を描写する語が出現している

83 石川淳『石川淳集』 「処女懐胎」（新潮社 1972 年 9 月） P309

84 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』（小学館 2007 年 10 月） P340-P341

箇所が多々ある事からも / a / の音が広がりというイメージに他の母音に比べて結び付けられやすいことがわかるだろう。つまり、/ a / は広がりを表す音象徴をもっているといえることができる。

### 第三項 / i / の音象徴

では、/ i / オノマトペではどうだろうか。用例の「ぴっ」はまっすぐに伸びている様子を表現するオノマトペとして用いられている。『擬音語擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』における解説文は以下の通りである。

「ぴっ ② 音・さま 勢いよく裂いたり、はいだりするさま。③ さま 背筋などを瞬間的に伸ばすさま。」<sup>85</sup>

引用元 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』P368

こちらも「勢いよく」や「瞬間的」などの意味は促音がつ音象徴からきていると考えられる。そして、「裂く」「はぐ」「伸ばす」という動詞に共通してみられるイメージは「直線的」というものであろう。また「ぴっ」には擬音語として笛の音や鳥の鳴き声を表す意味もあるが、それらの音も空気中をまっすぐに進む直線的なイメージを伴いやすい。

/ i / の音が直線と結びつく用例は他にもみられる。

「私も……私も……一寸何がう筈でありましたところ……何分よろしく」と云い終わって頭を少々畳から上げて見ると老人は未だに平伏しているので、はっと恐縮して又頭をぴたりと着けた。」<sup>86</sup>

「母上様、信夫は北海道に来て冬を迎え、やはり来てよかったと思います。うららかな日の下で、花見をするのもひとつの喜びですが、しかし、全身全霊をピンと張りつめて、きびしい寒さに耐えるということも、それ以上に大きな喜びではないでしょうか。」<sup>87</sup>

引用元 夏目漱石『吾輩は猫である』 P367

引用元 三浦綾子『塩狩峠』 P288

例えば、一つ目の用例は、頭と畳が密着して直線的な状態になっているのを表しており、二つ目の用例は、心理状態を一本の張りつめた糸という直線的な形状のものにたとえた表現である。

85 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』（小学館 2007 年 10 月）P368

86 夏目漱石『吾輩は猫である』（新潮社 2003 年 6 月）P367

87 三浦綾子『塩狩峠』（新潮社 1987 年 2 月）P288

加えて / i / オノマトペが「直線的」という音象徴をもつことは、/ i / オノマトペの出現頻度表（巻末表 9）からも明らかである。まず、打つ動作と組み合わせることで直線的な状態を作り出す「平手」が名詞の項目の出現語数三位にみられる。（「打つ」という言葉も動詞の項目の二位である）それだけでなく、直線的な状態を表現する「密着」がサ変名詞の六位、「平ら」が形容動詞の二位、「平たい」が形容詞の五位に現れている。これらの言葉は別の母音においては、/ a / で「平手」が1語、「平ら」が2語、「平たい」が3語、/ o / で「平ら」が1語みられたが、それでも / i / における「平手」「密着」「平ら」「平たい」の合計37語は特別に出現語数が高いといえることができるだろう。

ただし / e / オノマトペの「平ら」は21語（形容動詞全体の約27%）「平たい」は14語（約9%）みられた。これは / i / オノマトペにおける「平ら」が8語（約8%）「平たい」が14語（約5%）よりも高い割合であるといえる。ここから、/ i / と同じように / e / も「平ら」や「平たい」ことを表現するオノマトペを作ることができるといえるだろう。

そして、/ i / が「平ら」なことや「直線的」であることを表すということは「広がる」という音象徴をもつ / a / 音と比較するとさらに顕著になる。

「水をパッと飛ばす」「水をピッと飛ばす」この二つの表現はどちらも自然な表現である。しかし、描写されている状況を想像するとき「パッ」は飛ばす地点を中心に水が広がっていく様子を思い浮かべるが「ピッ」では鋭く一直線上に水が飛ぶ様子が思い浮かぶのではないだろうか。そして、このような / a / と / i / の違いが、先ほどのEdward Sapir の実験にみられたような大きさの音象徴への影響にも関係していると考えられる。つまり「広がる」という音象徴が「大きい」というイメージと結びつき、「直線的（広がらない）」という音象徴が「小さい」というイメージと結びついているのである。

#### 第四項 / u / の音象徴

用例にみられる「ぷっ」は煙管に息を吹き込む様子を表現したオノマトペである。『擬音語擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』における解説文をみると、以下のような表現がされていた。

「ぷっ ① 音・声・さま 思わず吹き出し笑いをするさま。② さま ものが丸くふくれるさま。怒って不愉快そうな顔つきをするさま。」<sup>88</sup>

引用元 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』P397

これらの意味に共通するのは「つき出す」運動であろう。吹き出し笑いは口をすぼめ、つき出した状態で息を吹き出す動作であり、ものがふくれるというのも外側へ向かう運動であるといえる。怒って顔をふくらませるのも似た動作である。このようなつき出す様子を表す / u / オノマトペは他にもみられる。

88 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』（小学館 2007 年 10 月）P397

「安さんは又煙草を呑み出した。ぶかりぶかりと煙が出た。」<sup>89</sup>

引用元 夏目漱石『坑夫』 P252

上の例は煙草から煙が出る様子を表したオノマトペの例である。ここでの「つき出す」運動とは、煙が出ていく様子と口をすぼめる動作のことである。ここからも、/ u /には「つき出す」運動と結びつく音象徴があると考えられることができるだろう。

また、/ u / オノマトペには「つき出す」以外によくみられる動作として「刺す」と「切る」というものがみられる。以下にその用例を示す。

「ぶすつと、短い矢が、足もとの土に刺さった。」<sup>90</sup>

「彼は兄の置いて行った書類をまた一纏めにして、元のかんじん燃で括ろうとした。彼が指先に力を入れた時、そのかんじん燃はぶつつりと切れた。」<sup>91</sup>

引用元 司馬遼太郎『国盗り物語（二） - 斎藤道三（後編） - 』P279

引用元 夏目漱石『道草』 P86

「刺す」は先ほどから取り上げている「つき出す」運動の一つであると考えられる。

/ u / オノマトペの出現頻度表（巻末 表 10）をみても、「刺す」という動作に関係した語がよくみられる。例えば、名詞の項目の八位に「刃物」がみられ、動詞の項目の四位に「突き刺す」十四位に「突き刺さる」二十七位に「刺さる」などがみられるのである。他の母音の出現頻度表においては「刺す」動作を表す動詞がみられなかったことから、は、ば行のオノマトペにおいて、「刺す」動作を表すオノマトペは / u / オノマトペに限られることがわかった。ここからも、「つき出す」運動と / u / が強く結びついていることが推測される。

では「切る」はどうだろうか。/ u / オノマトペの出現頻度表において、動詞の項目の二位は「断ち切る」三位は「切れる」であり、これは先ほどの「刺す」運動に関わる語で一番出現語数が多かった四位の「突き刺す」よりも高順位である。そこで「切る」という語を解説文にもつオノマトペを抽出すると以下ようになった。

ぶすり	ぶつつ	ぶつぶつ
ぶすん	ぶつつ	ぶつぶつ
ぶちっ	ぶつつり	ぶつり
ぶちっ	ぶつつり	ぶつり

89 夏目漱石『坑夫』（岩波書店 2014年2月）P252

90 司馬遼太郎『国盗り物語（二）-斎藤道三（後編）-』（新潮社 1988年11月）P279

91 夏目漱石『道草』（新潮社 1969年2月）P86



ぶちぶち	ぶつつり	ぶつり
ふつ	ぶつつん	ぶつん
ぶつつ	ぶつつん	ぶつん

ここからわかるように「切る」ことを表現する / u / オノマトペは決まって二字目が「す」か「た行」の音である。つまり、は、ば、ぱ行の / u / オノマトペは「す」や「た行」の音と組み合わせるとき「切る」ようすを表すようになると考えられる。

したがって / u / には「つき出す」運動を表す音象徴があり、加えて、は、ば、ぱ行の場合、「す」や「た行」と組み合わせさせて語根を作ることによって「切る」動作を表すようになるようである。

#### 第五項 / o / の音象徴

本来、五十音順でいくのであれば / e / を取り扱うべきなのだが、先に / o / の音象徴について考えることにしたい。なぜなら今まで取り扱って来た / a / 、 / u / と / o / の間には関連がみられるからである。

先に示した用例の「ぼっ」は植物の色が色づく様子を表現したオノマトペである。『擬音語擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』では以下のようにとりあげられている。

「ぼっ ③ さま 顔や体がほてったり、赤くなったりするさま。」<sup>92</sup>

引用元 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』P449

色づく様子といえば「ぼっ」というオノマトペも用いることができる。例えば以下のような用例がみられた。

「パツと華やかに色づくバラ色チークは女の子の憧れ♡」<sup>93</sup>

引用元 「FAVOR」

こちらは鮮やかな発色を売りにしたチークを紹介するサイトの煽り文である。ただし、ここで用いられている「パツ」と先の用例にみられた「ぼっ」では色づき方に違いがあるといわざるをえないだろう。

「パツ」は鮮やかで目立つような色づき方だが、それに比べて「ぼっ」は気づかないうちに淡く色が灯るような色づき方を想像させられるのではないだろうか。両者の用例のオノマトペを入れ替えてみると、その違いがよくわかる。

「せめてもの見立はまず伊丹の蘭菊、また八重桜、初紅葉、ぼっと色に出て」

92 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』（小学館 2007 年 10 月）P449

93 引用元 「FAVOR」（<http://favor.life/20567>）最終閲覧日 2019 年 1 月 30 日 11:39

「ポツと華やかに色づくバラ色チークは女の子の憧れ♡」

「ぱっと色に出て」となると、「ぽっ」に比べてはっきりとした色味を想像するし、「ポツと華やかに色づく」に至っては「ポツ」と「華やか」という言葉のイメージが結びつかず、少しの違和感すら覚える表現になってしまっている。

ここから / o / は / a / に比べて、穏やかで目立たない様子を表す音象徴があると考えられる。

その他にも / o / と結びつくイメージがある。それを明らかにするために、小説 404 作品の中から、何かが水面や地面に落ちることによって立てられる水音を表現した、は、ば、ぱ行のオノマトペの用例を抜き出し、その用例で水面や地面に落ちている対象の形状ごとに用例を分類した。みられた用例の一例は以下の通りである。

「ゆっくり置けばいいのに、かちゅんと放り出すようにするものだから、薄いコーヒーはばしゃりと受け皿の中にこぼれた。」<sup>94</sup>

「それでも仕方なしに草鞋の裏を着けるとびちゃりと云うが早いか、水際から、魚の鰭の様な波が立つ。」<sup>95</sup>

「緋鯉がぼちゃりと又跳ねる。」<sup>96</sup>

「私の腕にしがみついて、盛んにぼちゃぼちゃ浅い所で暴れ廻る。私は彼女の胴体を両手で抱えて、腹這いにさせて浮かしてやったり、シッカリ棒杭を掴ませて置いて、その脚を持って足掻き方を教えてやったり、わざと突然手をつつ放して苦い潮水を飲ましてやったり、それに飽きると波乗の稽古をしたり、浜辺にごろごろ寝ころびながら砂いたずらをしてみたり、夕方からは舟を借りて沖の方まで漕いで行ったり」<sup>97</sup>

引用元 曾野綾子『太郎物語 - 大学編 - 』P148

引用元 夏目漱石『坑夫』P219

引用元 夏目漱石『虞美人草』 P240

引用元 谷崎潤一郎『痴人の愛』 P35-P36

このような用例を、それぞれのオノマトペごとに分類したものが次ページの表である。それぞれの項目については、液体は水やコーヒーのようなものが零れる場合を指し、平は、平面のもの、粒は、粒状のものを示し、人型は人間が落ちる場合を指している。

94 曾野綾子『太郎物語 -大学編-』（新潮社 1987年5月）P148

95 夏目漱石『坑夫』（岩波書店 2014年2月）P219

96 夏目漱石『虞美人草』（新潮社 2010年5月）P240

97 谷崎潤一郎『痴人の愛』（新潮社 1985年6月）P35-P36

形状	バ シ ヤ	パ シヤ	バ チ ヤ	パ チャ	ビ シ ヤ	ピ シ ヤ	ピ チャ	ボ シ ヤ	ボ チャ	ポ チャ	全 体
液体	1				1	2	2			1	7
平				1		2	7		2		12
人型	1								1		2
粒		1						1		6	8
その他	1										1
なし	1		1		4	1	2		2		11
全体	4	1	1	1	5	5	11	1	5	7	41

今回、用例のみられたオノマトペは全て / a // i // o / オノマトペであった。それぞれの母音の各形状ごとの割合をみると以下の通りになる。

/ a / オノマトペ 7語中 平 14% 粒 14% 液体 14%

/ i / オノマトペ 21語中 平 43% 粒 0% 液体 24%

/ o / オノマトペ 13語中 平 15% 粒 54% 液体 7%

このように、母音が変わると同じ水音を表すオノマトペでもその対象の形状が異なってくる。/ a / オノマトペは三項目とも同じ割合であるが / i / オノマトペは「平」の項目が高く、/ o / オノマトペは「粒」の項目の割合が高いのである。これは、/i/ に「直線的」という音象徴があることが平面の対象とも結びついていると推測される。このように考えると、「粒」の項目の割合の高い / o / オノマトペも同様に「粒状」という音象徴があるのではないだろうか。

/ o / オノマトペの出現頻度表（巻末 表 11）をみると、粒状の形態である「水滴」が名詞の項目の一位であり、名詞の七位には「粒状」という語もみられる。「水滴」のような水に関係した名詞はどの母音でも頻繁にみられるのだが、「水滴」が水関係の名詞で一番出現語数の順位が高いのは / o / オノマトペのみである。他の母音において、水関係の名詞で出現語数が最も多いのは / a / オノマトペでは「水面」。/ i / オノマトペでは「液体」。/ u / オノマトペでは「水中」。/ e / オノマトペでは「水分」であった。これらの語と比較しても、/ o / が他の母音に比べて「粒状」という形と結びついていることがわかるだろう。

#### 第六項 / e / の音象徴

先の実例の「ぺっ」は食べた柿を吐き出す様子を表すオノマトペである。『擬音語擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』の解説文で「ぺっ」は以下のように取り上げられている。

「ぺっ ① 音・さま つばや口中のものを鋭くはき出すさま。」<sup>98</sup>

引用元 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』P420

しかし「はき出す」動作は外に向かう動作であるため「u」系のオノマトペである「ぷっ」でも表すことができる。実際に以下の用例がみられる。

「おやつをあげるとすぐぷっと吐き出すので  
「どういふつもりだ。いらぬなら返してね」と落ちてるおやつを拾うと  
「ダメダメ。持って行かないで」とばかりに、また口に入れる  
「食べるの？」と様子を伺うと、またぷっと吐き出す」<sup>99</sup>

引用元「何を書いても構いませんので@生活板51」

上の例は、飼い犬が与えたお菓子を吐き出して遊ぶ様子を「ぷっ」というオノマトペで表現している。先に示した柿の例と比較しても、吐き出すものは両方とも食べ物であり、一口で口に入る大きさのものであるという点で共通点が多いといえるだろう。では、「ぷっ」と「ぺっ」の違いはどこにあるのだろうか。二つの用例にみられたオノマトペを入れ替えることで違いをみていきたい。

「その時与吉の鼻の穴が震える様に動いた。厚い唇が右の方に歪んだ。そして、食いかいた柿の一片をぷっと吐いた。」

「おやつをあげるとすぐぺっと吐き出すので  
「どういふつもりだ。いらぬなら返してね」と落ちてるおやつを拾うと  
「ダメダメ。持って行かないで」とばかりに、また口に入れる  
「食べるの？」と様子を伺うと、またぺっと吐き出す」

これらとオノマトペを変更する前の用例を比較してみると、「ぺっ」を用いると汚らしい印象や不快な印象が生まれることがわかるだろう。

不快な印象を生み出すものとして、他にば行オノマトペがあげられると先に述べた。例えば「べたっ」と「びたっ」は / e / と / i / と使われている母音が違うものの、両者とも貼り付く様子を表すオノマトペであり「ぺたっ」や「びたっ」に比べると不快な印象を抱く響きをもっている。しかし、「べたっ」と「びたっ」の辞典における解説文をみると、そこには違いがみられる。

98 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』（小学館 2007 年 10 月）P420

99 「何を書いても構いませんので@生活板 51」

(<https://kohada.open2ch.net/test/read.cgi/kankon/1507221071/22>) 最終閲覧日 2019 年 1 月 30 日 16:15

「びたっ 音・さま 強くはりつけるさま。」<sup>100</sup>

「べたっ ① さま 粘着状のものがかたまりになって気持ちわるくはりつくさま。ねばりつくさま。」<sup>101</sup>

引用元 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』 P362 P416

第三節で濁音化によって生じる五つの効果を取りあげた。それらに当てはめてみると「びたっ」は動作の程度が大きくなることが主な効果として据えられており、それに対して「べたっ」は不快感を表すことが濁音化の主な効果とされている。このように、同じば行オノマトペでも、/ e / オノマトペにおいて不快感を表す効果を主な効果にしているものがみられることがわかるだろう。/ e / オノマトペの出現頻度表（巻末 表 12）をみても、形容動詞の項目の十位に「不快」がみられ、出現語数は3語と少ないが、この順位は他の母音と比べても高順位である。（出現語数が少ないのは、/ e / オノマトペそのものの数が少ないことが原因として考えられる。分析対象の925語のうち、/ a / オノマトペ 163語 / i / オノマトペ 255語 / u / オノマトペ 152語 / e / オノマトペ 134語 / o / オノマトペ 221語である）

また、普段は不快な印象とは結び付きにくいば行オノマトペ以外のオノマトペも / e / オノマトペでは不快な印象と結びついている場合がある。

「口をきちんと閉じないで噛む癖のある人は、食事の時に「ぺちやぺちや」とか「くちやくちや」とか不快な音をたてて食べます。私はそれが大嫌いで、楽しい食事が一気に憂鬱になり、おいしい料理がとたんにまずく感じてしまいます。」<sup>102</sup>

「思い切って飲んでみると、勢よく舌を入れてびちやびちややってみると驚いた。何だか舌の先を針でさされた様にぴりりとした。」<sup>103</sup>

引用元 「 yahoo 知恵袋」

100 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』（小学館 2007年10月）P362

101 小野正弘『擬音語擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』（小学館 2007年10月）P416

102 「yahoo 知恵袋」

([https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question\\_detail/q1232957532](https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1232957532)) 最終閲覧日 2019年1月30日 11:40

103 夏目漱石『吾輩は猫である』（新潮社 2003年6月）P541-P542

ここでは食事のオノマトペとして「ぺちやぺちや」と「びちやびちや」を用いている。しかし「ぺちやぺちや」が不快な音を表すものとされているのに対して「びちやびちや」は水面を舐める行動として用いられ、そこに不快かどうかという評価は含まれていないのである。「ぺちやぺちや」や「びちやびちや」は、ば行オノマトペであり、通常は不快な印象を持つことはあまりない。このようなオノマトペが不快な印象と結びついていることから / e / という音が不快な印象を表すという音象徴を持っていると考えられる。

### 第七節 第三章のまとめ

第三章では、まずオノマトペを分類することで、オノマトペの基本的な形態が一モーラか二モーラの語根に、促音、撥音、リ音、長音を組み合わせたものであるということがわかった。その後、複数のオノマトペに共通する要素として特殊モーラ、リ音、反復形を持つ音象徴を用例をもとにして考え、それらは語根につくことでオノマトペが表現する音・動きの早さや継続時間、繰り返しの回数などを指し示す効果を持っていることがわかってきた。

そして、語根の音象徴は、子音と母音にわけたうえで『擬音語擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』の解説文に使われている語を分析することで明らかにしようと試みた。それによって / h / 音は擬音語として使われる際、空気の動きを意味する音象徴を持っており、擬態語では、動作対象の弱々しさややわらかさを表すものがよくみられることが読み取れた。また / p / ・ / b / 音には、/ h / にはみられない「破裂」を表すオノマトペがみられたり、何かの表面に物体が影響を及ぼしたり、面そのものに変化がおきたりする様子を表す音象徴があることが明らかになってきている。

母音では / a / は広がり、/ i / は直線的、/ u / はつき出す、/ e / は不快な印象、/ o / は目立たない様子や対象が粒状であることを表す音象徴があることを取り上げた。

しかし、これらの音象徴が発生している原因はどこにあるのだろうか。はじめに、音象徴とは、音声の語の習慣的な意味とは違う意味と結びつくときに生まれるということ述べた。結びつけられる意味については、今までみてきたようなものがあげられるだろうが、その意味に結びつく音声についての分析はまだ行えていない。

ここからは、音声、もしくは音声を発音する調音器官の動きに注目し、音象徴を生み出すうえで不可欠である音声という観点から、音象徴が発生する理由をみていきたい。

## 第四章 音象徴と音声

### 第一節 子音の音声

ここまでさまざまな音が意味と結びついていることをみてきた。しかし、なぜこのような音と意味の結びつきが生まれるのだろうか。それを考えるために、ここからは、は、ば、ぱ行の音声とそれらの音が発せられる時の調音器官の動きについてみていくことにする。

その前に、は、ば、ぱ行の音声とはどのようなものなのかを理解するために、国際音声記号におけるそれぞれの音の表記を確認したい。

国際音声記号とは世界中の言語の音声を表すことができる記号である。以下にそのなかで子音のうち、肺から流れる空気をそのまま用いて作られる音声を表した表を示す。

	両唇音	唇歯音	歯音	歯茎音	後部歯茎音	そり舌音
破裂音	p b			t d		ʈ ɖ
鼻音	m	ɱ		n		ɳ
ふるえ音	ʙ			r		
たたき音・はじき音		v		ɾ		ɽ
摩擦音	ɸ β	f v	θ ð	s z	ʃ ʒ	ɬ ɮ
側面摩擦音				ɬ ɮ		
接近音		ʋ		ɹ		ɻ
側面接近音				ɭ		ɮ

	硬口蓋音	軟口蓋音	口蓋垂音	咽頭音	声門音
破裂音	c ɟ	k ɡ	q ɢ		ʔ
鼻音	ɲ	ŋ	ɴ		
ふるえ音			ʀ		
たたき音・はじき音					
摩擦音	ç ʝ	x ɣ	χ ʁ	ħ ʕ	h ɦ
側面摩擦音					
接近音	j	ɥ			
側面接近音	ʎ	ʟ			

104

引用元 「IPA 国際音声字母（記号）」

表の横軸にはその音声を発音する際の調音位置が示されている。それぞれの音の発音に

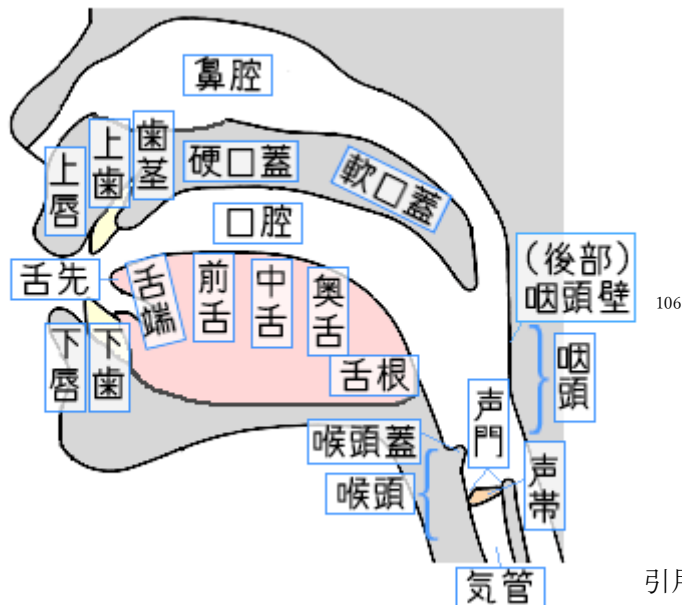
104 「IPA 国際音声字母（記号）」

([http://www.coelang.tufts.ac.jp/ipa/consonant\\_pulmonic\\_map.php](http://www.coelang.tufts.ac.jp/ipa/consonant_pulmonic_map.php)) 最終閲覧日 2019年1月30日 11:41

関わる調音体は以下の通りである。それぞれの調音体の位置は下記の図で確認してほしい。

「調音位置	調音体
(1) 両唇音	上下の口唇
(2) 唇歯音	上部の門歯と下唇
(3) 歯音	上部の門歯と舌尖 (= 舌尖あるいは舌端)
(4) 歯茎音	歯茎と舌尖
(5) 後部歯茎音	後部歯茎と舌尖
※ そり舌音	後部歯茎と舌尖あるいは舌尖の裏と硬口蓋
(a) 歯茎硬口蓋音	前部硬口蓋と前舌
(6) 硬口蓋音	後部硬口蓋と前舌
(7) 軟口蓋音	軟口蓋と後舌
(8) 口蓋垂音	口蓋垂と後舌～舌根
(9) 咽頭音	中咽頭と舌根
(b) 喉頭蓋音	喉頭蓋と下咽頭
(10) 声門音	左右の声帯 <sup>105</sup> 」

引用元 福盛貴弘『基礎から日本語音声学』 P116



引用元 「にほん語表現のページ」

105 福盛貴弘『基礎から日本語音声学』（東京堂出版 2010 年 12 月）P116

106 「にほん語表現のページ」（<http://nifongo.style.coocan.jp/index.html>）最終閲覧日 2019 年 1 月 30 日 11:43



そもそも子音というのは、息の流れを音声器官が妨害することで発せられる音声である。そして、調音体とは息の流れを妨害する音声器官を指すものであり、例えば、両唇音は上下の口唇が息の流れを妨害することで発せられる音声であるといえる。

そして縦軸には、調音体がどのように息の流れを妨害するのかを表す調音方式が示されている。国際音声記号における調音方式には、破裂音、鼻音、ふるえ音、はじき音、摩擦音、側面摩擦音、接近音、側面接近音などがあげられ、それらは大きく口腔内で調音体がかくつくものとくつつかないものに分けられる。

調音体がかくついて息の流れを完全に閉鎖する調音方式として以下のようなものがあげられる。

- 「(1) 破裂音：しっかり閉鎖する
- (2) 鼻音：しっかり閉鎖する
- (3) ふるえ音：瞬間的な閉鎖が繰り返される
- (4) はじき音：瞬間的に閉鎖する」<sup>107</sup>

引用元 福盛貴弘『基礎から日本語音声学』 P117

加えて、破裂音と鼻音の違いは鼻腔に空気が流れるかどうかというものである。例えば、声帯を震わせ、両唇で完全に息の流れを閉鎖して発音すると [ b ] の音が、鼻腔へ息を通して同じように発音すると [ m ] の音が発音されるということである。

では、調音体がかくつかず、息の流れが完全に閉鎖されない音はどのようなものなのだろうか。こちらには摩擦音と接近音があげられる。これらは発音の際に調音体の間にできる隙間の大きさによって呼称がわけられており、相対的に隙間が狭い方が摩擦音であり広い方が接近音である。いままであげた子音の調音様式をまとめると以下ようになる。

「破裂音・鼻音・ふるえ音・はじき音 > 摩擦音 > 接近音 > 母音」  
完全な閉鎖                                  狭窄 狭    ⇔    広    <sup>108</sup>

引用元 福盛貴弘『基礎から日本語音声学』 P118

その他の調音方式に側面摩擦音、側面接近音があげられる。摩擦音や接近音は調音体の隙間を息が通過することで発音されるが、その通過の仕方には中線と側面の二種類がみられる。この空気の通過の仕方の違いがそれぞれの違いを生み出し、舌の中心に隙間ができる中線で発音される音が摩擦音や接近音であり、舌縁が接触せず舌の脇から息が通る音が側面摩擦音と側面接近音となるのである。

107 福盛貴弘『基礎から日本語音声学』（東京堂出版 2010 年 12 月）P117

108 福盛貴弘『基礎から日本語音声学』（東京堂出版 2010 年 12 月）P118

したがって、子音の調音方式は「調音体がかっつくかどうか。くっつかないなら生まれる隙間が狭いか広いか」「鼻腔へ空気が抜けるかどうか」「息が舌の中央を通るか脇を通るか」という三つの観点で分類することができるといえる。

最後に、[ p ] と [ b ] のような同じ調音体、同じ調音方式で発音する音の違いを確認しておきたい。[ p ] と [ b ] は共に両唇破裂音だが、その違いは発音する際に声帯が震えるか震えないかというところにある。声帯が震えない場合を無声音、震える場合を有声音というのだが、この場合は [ p ] が無声音 [ b ] が有声音であり、表の他の項目においても同じ枠に二つ以上の音が分類されている場合は左側が無声音であり右側が有声音である。

そして、ここまでにあげた「調音体」「調音位置」に「有声か無声か」という観点を加えると特定の子音の音声を指し示すことができる。例えば [ p ] は無声両唇破裂音、[ n ] は有声歯茎鼻音、[ l ] は有声歯茎側面接近音といったように呼ぶことができるのである。以下、子音を表す際には国際音声記号にのっとった呼称で表すことにする。

さて、ここまで子音の調音位置や調音方式についてみてきたが、ここからは [ h ]、[ p ] ・ [ b ] の三音に戻り、それぞれの子音がどのような音なのか、そしてそれが音象徴に与えている影響にはどのようなものがあるのかについて考えていきたい。

#### 第一項 は行の音声

は行の音声は、国際音声記号において以下の通り表される。

ハ [ha] ヒ [çi] フ [ɸw] ヘ [he] ホ [ho]  
ヒヤ [çə] ヒュ [çu] ヒョ [ço]

それぞれの子音の調音位置と調音体は以下の通りである。

h 無声声門摩擦音

調音位置 声門 調音体 左右の声帯

ç 無声硬口蓋摩擦音

調音位置 硬口蓋 調音体 後部硬口蓋と前舌

ɸ 無声両唇摩擦音

調音位置 両唇 調音体 上下の口唇<sup>109</sup>

これらを見て気づくのは、調音点の違いはあるが全て無声の摩擦音であるということであろう。摩擦音とは、調音体が口腔を狭めることでできた比較的狭い隙間から息が出てことによって発音される音声である。これは、口腔を一度閉鎖してしまう破裂音や鼻音、ふるえ・はじき音と比べて、弱い妨害で発音することができる音であるといえる。

109 参考 福盛貴弘『基礎からの日本語音声学』（東京堂出版 2010 年 12 月）P116 P212

ここから、は行音は、か・た・な・ま・ら行より口腔内で空気の圧力が高まらず、速度の遅い、弱く柔らかい息で発される音といえると考えられるだろう。

実際、は行のオノマトペに目を向けてみると、そこには対象の弱々しさややわらかさを表す音象徴がみられるのというのは先に述べた通りである。

「ぼくはふわふわした羊毛の下に彼女の手をさぐりあてて握った。それは灼けたフォークのように冷たく、氷のように燃えていた。」<sup>110</sup>

「最近流行の、曇り空と言いますか、影の無い、柔らかいほわ〜とした感じの光質でちょっと暗いかな？、みたいな感じの広告写真を見るとことが多いと思います。」<sup>111</sup>

引用元 倉橋由美子『聖少女』 P152

引用元 「UNPLUGED STUDIO」

また、は行には空気の動きを意味する音象徴を持っていると推測できると述べたが、こちらの音象徴も発音方法との関わりがみられる。無声声門摩擦音である [h] は他の音に比べて発音するために多くの量の空気を必要とする音である。多くの息を使う音という発音方法であることが [h] の音と空気の音という意味を結びつける要因になっているとも考えられる。

このように、は行の音の発音方法と、は行のオノマトペにみられる音象徴には共通している部分があるといえるだろう。これは、人が発音する際に無意識的に感じている発音方法と音の意味を結びつけたことによって音象徴が生まれたとも考えられるかもしれないが、それを示すには、は行のオノマトペのみでは不十分であるため、今後の課題としていきたい。

しかし、発音方法と音象徴に共通点があるというのは、それぞれの音声の音象徴を考えるうえで重要な事項である。ここからは [p] ・ [b] の発音方法とオノマトペの関係についてみていきたい。

## 第二項 ば、ぱ行の音声

ば、ぱ行の音声を国際音声記号で表現すると以下のようなになる。

ば行

バ [ba] ビ [bʲi] ブ [bu] ベ [be] ボ [bo]

ビャ [bʲa] ビュ [bʲu] ビョ [bʲo]

ただし、危ない [abunai] の [b] のように前後を母音で挟まれるとき有声破裂

110 倉橋由美子『聖少女』（新潮社 1965年9月）P152

111 「UNPLUGED STUDIO」（<http://blog.enjoycamera.jp/archives/1379>）最終閲覧日 2019年1月30日 11:45

音は摩擦音になることがある。その場合は [b] ではなく [β] になるのだが、今回は適応範囲の広い有声両唇破裂音の [b] をば行の子音として考えることにする。

それぞれの子音の調音位置と調音体は以下の通りである。

b 有声両唇破裂音

調音位置 上下の口唇 調音体 上下の口唇

b<sup>j</sup> 有声両唇破裂音 硬口蓋化

調音位置 上下の口唇 調音体 上下の口唇

硬口蓋化とは、子音の後に [i] 音の発音準備を行う現象であり、直音のイ段および拗音でみられることがある。例えば、か行の「き」を発音しようとして、もし硬口蓋化しない [ki] で発音すると「クィ」という発音になってしまい、想定していた発音とかけ離れてしまう。このような場合に [i] 音を発音するために硬口蓋化が発生するのである。ちなみに硬口蓋化は、ば行やぱ行以外にも、か、が、ま、ら行など拗音の発音がみられる行で使われているが、硬口蓋化がみられないさ、ざ、た、だ、な、は行は、イ段の直音と拗音に他の段と違う子音が使われることで、想定されている発音が指し示されるようになっていく。先に述べた通り、は行の音声において、は [ha] とひ [çi] ひゃ [çã] ひゅ [çu] ひょ [ço] というように子音が使い分けられていることからその様子が確認できるだろう。

次は、ぱ行の発音をみていくことにする。

ぱ行

パ [pa] ピ [p<sup>j</sup>i] プ [pu] ペ [pe] ポ [po]

ピャ [p<sup>j</sup>ã] ピュ [p<sup>j</sup>u] ピョ [p<sup>j</sup>o]

それぞれの子音の調音位置と調音体は以下の通りである。

p 無声両唇破裂音

調音位置 上下の口唇 調音体 上下の口唇

p<sup>j</sup> 無声両唇破裂音 硬口蓋化

調音位置 上下の口唇 調音体 上下の口唇

さて、これらを見ると、摩擦音であるは行と違って、ぱ、ぱ行は破裂音であることがわかる。先に述べたぱ行、ぱ行オノマトペにのみ破裂という音象徴があることは、この調音方式の違いが影響していると考えられるだろう。

では [p] と [b] の音象徴の違いはどこからきているのだろうか。両者の音象徴の違いは、[b] は擬音語においては低音を表し、擬態語では対象・動作が重く大きいことや不快感と結びつくが、[p] では擬音語では高音、擬態語では対象・動作の小ささや軽さと好意的な印象に結びつくことにあると述べた。ここで [p] と [b] の音声としての違いを確認すると調音位置や調音体には変わりがなく、無声か有声かという部分に違いがあることがわかる。

無声音と有声音の違いは声帯が震えるかどうかである。そのため、有声音は無声音に比べて声帯を振動させる分、発声のための抵抗が大きいのである。これは、ば行オノマトペとぱ行オノマトペの音象徴の違いを考える際にも述べたが、大きな抵抗を伴う運動を行うためには大きなエネルギーが必要である。このような有声音の発音上の特徴が、ば行オノマトペにみられる活発な運動を示したり、大きなエネルギーが必要な重く大きな対象・運動を表したりことにつながっているのではないだろうか。

同じように、ば行オノマトペが持つ不快な印象も、有声音が無声音に負荷をかけて濁らせた音であることと関連付けると、やはり調音方式と関係があるということが出来るだろう。

また、ば行だけではなく一般的に濁音と呼ばれる、が行音 [ g ]、ざ行音 [ d z ] [ z ]、だ行音 [ d ] は全て有声音である。(有声音の全てが濁音であるわけではない。一般的には濁音とはいわれないま行音 [ m ]、な行音 [ n ]、ら行音 [ r ] は有声音であるし、母音も有声音である。しかし、これらは日本語において対応する清音がないという点で先にあげた音とは異なる) そして、ば行オノマトペにみられた対象・動作や不快感に関する音象徴は他の濁音オノマトペにもみられる現象であることから、子音の有声化が濁音化に伴う音象徴の変化に影響していると考えられるだろう。

ば行以外の濁音オノマトペ

対象・動作が重く大きいことを表す。

「コロコロとコインが転がっていくのを見ているだけでも楽しくなる！遊びながらお金が貯まる貯金箱です。」<sup>112</sup>

「トラックが交差点をまがるとき、荷物が落ちてごろごろところがあった。それで、近くにいた人たちはあわてて逃げた。」<sup>113</sup>

引用元 「コインが転がる貯金箱！コロコロコイン」

引用元 「日本語を楽しもう！」

動作が活発・動作の程度が激しいことを表す。

「仕事の会議中などで机を小刻みに指でトントンと叩く人の心理や性格を解説しま

112 「コインが転がる貯金箱！コロコロコイン」 (<https://corocorocoin.net/>) 最終閲覧日 2019年1月30日 11:46

113 「日本語を楽しもう！」

([https://pj.ninjal.ac.jp/archives/Onomatope/50\\_on/gorogoro.html](https://pj.ninjal.ac.jp/archives/Onomatope/50_on/gorogoro.html)) 最終閲覧日 2019年1月30日 11:46

す。」<sup>114</sup>

「誰か来たのでしょうか、荷物が届く予定は無く、朝早くに友人が来るはずもないので無視したら、「ドンドン、ドンドン!」と戸を叩かれました。」<sup>115</sup>

引用元「特徴シラベルコちゃん」

引用元「教えて!

goo」

不快感を表す。

「パサつき・広がり気になる方に  
重くならず毛先まで軽やかに  
「しっとりまとまる」髪が続く」<sup>116</sup>

「寒い冬なのに足裏が汗でじっとり!冬の汗は不可解ですよね。」<sup>117</sup>

引用元「TSUBAKI」

引用元「四季折々 How to do」

このように、ば、ば行の音声と音象徴にも一定のつながりがみられそうである。

まず [p]・[b] は [h] とは調音方式が違うことから [h] にはみられない音象徴を持っているといえる。これは [h] の柔らかいや弱々しいといった音象徴が [p]・[b] 音にみられないことにもいえることである。[p]・[b] は、口腔を完全に閉鎖することで口内の空気の圧力を高めてから発声する破裂音であるため、[h] にみられたような柔らかい息の動きとは結び付かないのである。

そして、[p] と [b] の間にみられる音象徴の違いには、子音が無声か有るか関わっている。有声音が無声音に比べて発声までの抵抗が大きいことが、濁音化によって対象や動作が重く大きなものになることや、不快な印象との結びつきが強くなることにつながっていると考えられるのである。

114 「特徴シラベルコちゃん」 (<https://siraberuko.jp/3596>) 最終閲覧日 2019年1月30日 11:47

115 「教えて! goo」 (<https://oshiete.goo.ne.jp/qa/3385668.html>) 最終閲覧日 2019年1月30日 11:48

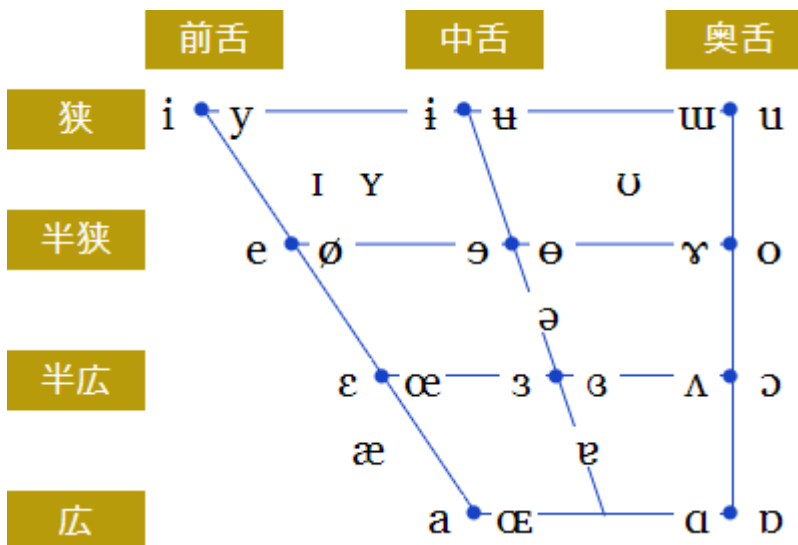
116 「TSUBAKI」 (<https://www.shiseido.co.jp/tsubaki/products/moist.html>) 最終閲覧日 2019年1月30日 11:25

117 「四季折々 How to do」 (<https://rarara-ran.com/952.html>) 最終閲覧日 2019年1月30日 11:26

## 第二節 母音の音声

ここまで、[h]、[p]・[b]の調音体や調音方式と音象徴の関係についてみてきた。ここからは母音の音声について同じように考えていきたい。

息の流れを音声器官が妨害することで発せられる音声の子音だとすると、母音はそれとは対照的な音であるといえる。母音とは、肺から流れた息がなるべく妨害されることなく発声される音声なのである。母音の国際音声記号による表記は以下の表を参考にしてほしい。



118

引用元「IPA 国際音声字母（記号）」

子音では調音体、調音方式、有声無声が音声进行分类する基準であったが、母音における基準は、口唇形状、舌位置、開口度があげられる。

口唇形状には円唇と非円唇がみられる。一般的には、発音の際に唇を丸めれば円唇、丸めなければ非円唇である。しかし、同じ円唇母音でも視覚的に唇の丸め具合がわかりにくいものもあるため、その場合は、唇の端を中心に寄せるか否かで円唇母音か非円唇母音かを見分けることになっている。唇を中心に寄せるという動作は同時に唇をつき出す動きにつながるため、[u]のような円唇母音では、特徴として唇が突き出ることがあげられるのである。

舌位置とは、発音の際に舌のどの部分が口蓋に向かって接近するかによって音声を区別する基準である。こちらは上記の表の通り前舌、中舌、後舌（奥舌）の三つがみられる。

それぞれの発音方法としては、前舌母音は舌の中間部（舌先ではない）が硬口蓋に接近して発音する音、後舌母音は舌の奥の方が軟口蓋に接近して発音する音であ

118 引用元「IPA 国際音声字母（記号）」

([http://www.coelang.tufts.ac.jp/ipa/vowel\\_map.php](http://www.coelang.tufts.ac.jp/ipa/vowel_map.php)) 最終閲覧日 2019年1月30日 11:49

り、中舌母音は前舌と後舌の中間部が後部硬口蓋に接近して発音する音であるといえる。

最後に開口度は、発音の際に下顎をどの程度下げるかどうかという基準である。こちらでも表の通り、狭、半狭、半広、広の四つの区分がみられ、狭から広にかけて口の開き具合が大きくなっていく。

そして、日本語の母音の発音を国際音声記号で表すと以下のようになる。

あ [a] 非円唇後舌広母音  
舌位置 後舌 開口度 広

い [i] 非円唇前舌狭母音  
舌位置 前舌 開口度 狭

う [u] 非円唇後舌狭母音  
舌位置 後舌 開口度 狭

え [e] 非円唇前舌半狭母音  
舌位置 前舌 開口度 半狭

お [o] 円唇後舌半狭母音  
舌位置 後舌 開口度 半狭

まず注目したいのは、[a] 音と [i] 音が舌位置と開口度において対照的な音であるということである。言い換えると [a] は口を大きく開けて舌の後ろの方を持ち上げて発音する音、[i] は口をあまりに開けずに舌の前の方を持ち上げて発音する音だといえるのだが、この違いは、先に述べたそれぞれの音象徴の違いと共通点を持つ。第三章第五節において [a] の音象徴として広がり、[i] の音象徴として直線的であることや平であることをあげた。これらを調音方式と関連付けて考えると、広がりというイメージと結びつく [a] は口を大きく広げて発音する音であり、直線的というイメージを持つ [i] は口を直線の形に引いて発音する音であるということになる。つまり、発音の際の口の形状が音象徴との結びつきを持っていると考えられるのである。

この現象は他の母音にも発生している。[i] と同じように直線的であることや平たいことと結びつく [e] も開口度が狭い母音である。また、粒状という音象徴があると述べた [o] は五つの母音のうち唯一の唇を丸めて発音する円唇音である。こちらでも発音の際の口の形状と音象徴が結びついている例といえるだろう。

ここから、つき出す運動を表す「う」[u] も音象徴と発音の際の口の形状が関係していると考えられるが、[u] は非円唇母音であり、それだけをみると唇をつき出



すという動きはみられない。しかし、一度「う」と発音してみしてほしい。唇をつき出して発音している人もいないのではないだろうか。これは個人差がみられる部分であり、特に西日本方言では「う」と発音する際、唇をつき出して円唇母音 [u] に近い発音をすることが多いのである。こうしてみると、「う」と発音する際の口の動きとつき出すという運動にも少なからず関わりがあると考えられるだろう。

### 第三節 第四章のまとめ

ここまで、音象徴と音声の関係をみてきたうえで、調音方式が音象徴と結びついていることがわかってきた。子音においては摩擦音や破裂音という調音方式や有声であるか無声であるかということが [h] [p]・[b] の音象徴の違いに影響を与えていた。母音においては、発音時の口の形とそれぞれの音象徴の間に類似点を見ることができた。しかし、これだけで音象徴が調音方式から生み出されたと考えすることはできないだろう。なぜなら、今回対象としたのは、は、ば、ば行の音声のみであるし、[o] と結びつく目立たないという音象徴など、調音方式のみで説明するのは難しい音象徴もあるからである。しかし、音象徴と調音方式の間に結びつきがみられる限り、音象徴を考える際に音声の面からの分析をないがしろにすることはできないだろう。これからは、は、ば、ば行以外のオノマトペも研究対象に加えたうえで、調音方式以外の観点から更に分析を進めていく必要を感じる。

## 第五章 まとめ・今後の課題

今回は、まずオノマトペの基本的な形態にはじまり、語末につく促音・撥音・リ音・長音、そして反復形などのオノマトペによくみられる活用がオノマトペの意味にどのような影響をもたらすのかをみてきた。

その後、濁音化や半濁音化がもたらす音象徴の変化を確認したうえで、/h//p//b/ の三音が持つ音象徴とはどのようなものなのかをオノマトペの意味の変化を手がかりに考えることもしてきた。

そして最後には、それらの音声が発音される際の調音器官の動きに注目し、それらとオノマトペの間に一定の関わりがあるということも確認した。

これらをふまえて、今後の課題は大きくわけて二つある。

一つは、は、ば、ば行以外のオノマトペの音象徴の分析についてである。今回は分析対象をは、ば、ば行のオノマトペに限定してしまったため、他の音声の音象徴についてはほとんどみることができなかった。加えて、は、ば、ば行のオノマトペも /h//p//b/ の三音と母音だけで形成されているわけではない。「ばたばた」なら /t/ が「ぴかぴか」なら /k/ が要素として含まれているのである。このような音声も音象徴にもたらす影響を考えるのも今後の課題といえるであろう。

そしてもう一つは、時代に伴う言語の変化を視野にいれられなかったことである。今回は、は行を清音、ば行を濁音、ぱ行を半濁音として扱ってきたが、現在の、は行音の位置には、元々ば行音があったらしい。つまり、ぱ行とば行が清音と濁音の関係にあるともいえるのである。そもそも、無声音と有声音が清音と濁音の関係にあるのは、は行以外の有声音無声音の対立を持つ行全てでみられる現象である。

( [k] と [g] 、 [t] と [d] など )

このように考えると、 [h] と [p] ・ [b] が清音、濁音、半濁音の関係にあるとしてしまうのには疑問の余地が残るといわざるを得ないであろう。今後は [h] と [p] ・ [b] をわけたうえでの再分析が必要となると予測される。

以上が、本研究のまとめと今後の課題である。これからも新たにみえてきた課題をふまえてさらに研究を進めていきたい。

## 第六章 参考文献

寺澤芳雄 編『英語語源辞典』 ( 研究社 1997年 6 月 )

田守育啓『オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ』 ( 岩波書店 2002年 9 月 )

丹野眞智俊『オノマトペ<<擬音語・擬態語>>を考える—日本語音韻の心理学的研究—』 ( あいり出版 2005年 8 月 )

小野正弘『擬音語擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』 ( 小学館 2007年10月 )

福盛貴弘『基礎から日本語音声学』 ( 東京堂出版 2010年12月 ) P117

篠原和子・宇野涼子編『オノマトペ研究の射程—近づく音と意味』 ( ひつじ書房 2013年 4 月 ) P4

新村出 編『広辞苑 第七版』 ( 岩波書店 2018年 1 月 ) P688

「 IPA 国際音声字母 ( 記号 ) 」

( [http://www.coelang.tufs.ac.jp/ipa/consonant\\_pulmonic\\_map.php](http://www.coelang.tufs.ac.jp/ipa/consonant_pulmonic_map.php) ) 最終閲覧日 2019年 1 月30日 11:41

「にほん語表現のページ」

( <http://nifongo.style.coocan.jp/index.html> ) 最終閲覧日2019年 1 月30日 11:43  
引用元 「 IPA 国際音声字母 ( 記号 ) 」

( [http://www.coelang.tufs.ac.jp/ipa/vowel\\_map.php](http://www.coelang.tufs.ac.jp/ipa/vowel_map.php) ) 最終閲覧日 2019年 1 月30日 11:49